

ル 4
4500
2



善光寺道名所圖會卷之二



目錄

御供所	三鳥居	末社	拜殿	神樂殿	繪馬殿
神宮寺	一鳥居	籠屋	二鳥居	寶庫	
境内樹木	社領	仁科街道	神寶	鶴丸の説	
清音滝	瀧入観音	社傳			
大町	仁科古城	静女塚	磯禪尼塚		
是より本街道へ戻ると順路を記す松本乃次小	森村の湖水	佐野二僧の塚	碑銘		
○岡田宿	あご坂	荻屋原	鷹巣根古城		
○會田宿	廣田寺	弘法大師袈裟掛松	無量寺		
岩井堂	立峠	乱橋	法橋		
船森山神明	仁熊村	叢石と採図説	法橋		
		青柳	着柳氏古城		
		切通	二ヶ所		



○

麻績宿

光明寺

神明宮

猿ヶ馬場

弘法大師袈裟掛松

蟹清水

夜ヶ池

燧石

中原の古木

栗原の葡萄棚

○ 稻荷山宿

謙信出城跡

武水別神社

八幡村あり

姥捨山

長樂寺

冠着山

長谷寺

長谷村

長谷神社

將軍塚

白叢翁の碑

白鳥山康樂寺

塩等村

寶物

寺傳

篠井迄分

長勝寺二王

三水村

姫殺田

久米路橋

水内橋と云水内村の地内あり

訖宮岩

不動ヶ池

館の岩

弥太郎ヶ滝

吉原の譜

熊野権現

牧の嶋

琵琶ヶ城跡

犀川水源

犀川名義

二ノ一

宮本神明宮

宮本村あり仁科六十御神明の恵社なり社殿是年北三石除地五石

本社祭神

國常立尊 兎屋根命 四柱相殿

末社

一ノ宮。二ノ宮。武山大明神。上諏訪。下諏訪以上本社の右にあり

拜殿

本社の前。神樂殿。繪馬殿。御供所

三ノ鳥居

以上瑞籬に内なり。籠屋。二ノ鳥居

境内老杉

百七十二本。大檜百六十本。大槻

神寶

鶴丸の太刀。鏡一面。霞鞭。以上宝永四亥年改形

鶴丸の太刀

此事予先小間侍了々尾張城下七間丁小笠原聖徳一

寺に親鸞

聖人より附屬の付室七種に内あり故小七宝山といふ其内持

乃丸の太刀

今もあや云按るに伊勢豊受皇に神人出口氏小持の丸

と云太刀

と納むその始を聞小濃州久利の土岐悪五郎が太刀なり

天文の頃

乃人なり民間に伝ふ悪五郎京五奈格あり



あつる時との太刀川へ落したる武將二羽らとて揚し鴉乃嘴の痕残
アノ友鴉の丸と名づくやアノ野俗此類多し夫より代へ侍へく土岐
が室とれ久し利の城主土岐三河守を武藏守に亡りてより其太
刀同國金山今此兼山あり故武藏守彼右刀を同所地蔵院納りて
奇怪の事あり故森中書忠政 神君へ献しける然しよて以来出口
家の藏し有しやを甲斐郡後寺に鴉の丸や同名乃右刀也知れ
左に此神室の鴉丸を別物の同名をんう忠政と武藏守長可れ子也

△例祭○御戸開正月十日○祈年祭二月九日○御戸閉十二月十六日 其外正又九月十

四日○國家安穩五穀豐饒の祈禱念じ

神主一志檢校菅原茂興代、黒印預 小野左衛門 横澤権頭

志水右近 神子一人若狭其外小祝十二人八乙女八人此村にあり

夫當社々仁科六十六郷の惣社中と嘉兼二巳年伊勢より勸請ありし

一志檢校の家其時勢別より供奉此家筋なり外六ヶ所麻生朝仁熊館田以上七ヶ所同一時勸請ありしとあり此宮本村を往古より村中

上生坂

みゆ社家はく今ふ至るを諸役免許なり慶安にあらると一村二十五軒
カケケ物りり星うらと今も百軒餘とあれは乃以より社家と百
姓や別をけるや今も婦人月次の障に百姓とく別火まる半古へより
れ風俗とや思はせき

○清音常光寺村横川氏吐口の嶮巖に佛像此形あり苔むし鮮みを見へ

侍りり里俗瀧の入観音と稱して伝は二十一番の札所なり即前の内大臣

家乃御歌あり板に寫して瀧の傍に建つ本書を横川氏に藏む

仁科の里に清音に瀧とよめる 芳内大臣扁

玉絆のみち遠くと伝はるるれよとれ多きはとて見舞

まむ龍乃はく玉津津の定にささる波のむらり 豊阿

おろくややはるれ散ば多喜乃音 又せ

按に信濃二十一番順禮札所と定る上り今更謂をれ小あり神とほりり

玉勝間本所宣長を又侍りり大和國壺坂寺此奥なる山は五百羅漢乃形

隨筆



常光寺山
 瀑布の入観音
 信濃廿一番
 系は河
 竹もあわぬ
 山水乃
 清音れ瀧
 小耳や
 わらん
 竹、庵



清音の滝
 懸渡と音
 魚崖千丈お紗如
 砂岸停節賞
 有餘一斗秀才
 題不就清音
 自便と蒼疎
 辛卯
 林鏡日 全久而 道人
 写一松のつても
 およそ
 きとこれ
 滝乃
 水を粧ひと
 利忠

とて石に數百の人の形を彫らり或人の口ふとは是と俗小羅漢とせり
あやいありぬこなりよくふせむみあつ代の人乃彫り神の侍と
と見へりといへばおのこいふとてこれぞ實にたぞわんとせ覺れそん
古に神の御像又さぬをもせやうと彫りて佛の形と思へる多し又物乃
形彫り石ふありとるが怪し何をも辨へざれば世ふ多くとんこは上つ代ゆ
種く石に物ある事此多在り神代の所為をも今まはあはれん人さ
とてのこぞありける讚岐困に其所の名聞けるを忘れしつて廣く谷一
以有限の岩一つもわらば大なるせも小きゆも悉く仏の形を彫る所ありと其
數うやへるべしとせや或人其さぬをよくふくあり怪し石ユよき
せらるに大く日毎小數百人の石ユとして三十年をうれ月日と經く彫らぬ
斯までいなり得く又初をうり高く大なる數十仞の巖とていま其足代を構
むをうりし終つたなるをこば此ユとて人の力乃人限りあり下
か例もあはれとて其類いれやといふとこさうとかりき

幽谷餘韻

宿横川氏宅

沙門千丈實巖

崎嶇山路白雲迷忽喜相迎掃淨齋遲日未晡先投宿幽禽花裏咲人啼

讀瀑巖觀音

全

華表深沈崑樹幽陰飈肅々冷如秋水簾卷上波濤勢疑向潮音洞裏遊

書獨立書後

禿髮以下三十六字天間道人獨立所書蓋自作詩也來信州
籃輿偶憩常光寺村横川氏家因觀此一幀掛在壁間竊感其
家雖處僻邑而其所藏如此奇異且賞其書枯槁寒瘁宛若膠
木皮膚悉脫不已顧古今善書者其所寫之文字多前人著述
耳如籀草記自叙帖所希見也獨觀天間道人遺墨未多觀其
輒寫古語若非自作詩偈則扁額之類耳蓋其氣象高邁猶書
之俊逸乎聞隱元和尚觀光於我也獨立亦寓崎港業暨後投
隱元為僧其書與暨傳入室者蓋元泰一人也元泰之後不聞
有傳者雖近有一人頗鳴于江戸其不及元泰遠矣况獨立乎

嘗閱清人所撰書畫譜，獨立名載焉，而謂不知其所終焉者，蓋不識東遊日本也。然其書在彼，亦擅名而為人珍明矣。凡其署名多為天間獨立，今橫川氏所藏，署為天間道人。余恐後人或遺其為獨立而忽之也，故為跋以告之。觀者取其字畫，則足矣。詩句趣向則略而可也。

○靜の墳墓

松壽村牛立の末寺号也

寺号也。此庵室少，尼傍一人住，名靜の弟守

了佛藥師如來を奉尊に安置せしむ。又借馬村の畠中に靜の母儀乃禪尼が塚あり三十歩をうり此周圍に古松乃柴垣をりて境とに松一株あり

按、其石碑の儀往古其物あり、後人の所為か、又母と前に終了靜を後ふは、と、河内り、石面乃月日あり、後なり母を九月とさる、靜女を十一月とせば可ら、ん、母が塚ふ千丈實巖の碑銘あり

磯禪師墓誌銘

信州安曇郡借馬邨有源義經妓女靜、母磯禪師、墓曰頓室、妙悟大姊、古松一株偃蓋可愛、近槁矣、換以禪者、大可彌窳寺、有靜鏡、經五六寸、表裏皆照、裏面微凹、物像倒見

例見之鏡松崎載五雜俎

村有藥師佛靜所奉持所謂守本靈杵寺後有大塩村土人所託信言與州相傳靜與禪師以義經故囚于鎌倉既免其胎縱反京師尋聞義經奔與州母子慕迹將赴與州路至信州適聞訛言大鹽喜謂與州千辛萬苦到則非也一則龍鐘一則婉孌典盡體疲莫若之何少焉就鍾者死因葬于此婉孌者成尼菴居終身今之藥師堂此其遺迹而墳勒曰勸院靜圓妙止大姊文治五年西九月中古輩彼藥師行化江府稠人之中或言此佛若真當副倒見鏡此時其鏡藏在神社而亦致之於是遊觀日蟻集矣余讀鶴飼氏所撰靜傳如其夜響金革以警覺義經慧也其唱峯白雪及緒環二歌不屈賴朝義也其面折讒佞不受媒媢貞也貞之與義烈也女子稍知方者皆能之也父母亦當訓之慧者固機變之智也不可學而得焉不可訓而成焉而亦往往有之未足以為奇也唯如天子詔擇名妓百人舞一闋以祈雨於神泉苑雖夏九十九人天彌亢旱最後靜進一步纔飄舞袖則見陰雲倏忽四起甘雨滂沛蒼生其蘇豈非至誠感天邪以此誠配英雄如義經者想每追隨旗鼓之下而運籌於帷幄以激贊義經勇氣當數有大于防彼夜襲者乎鶴飼氏文雖記靜為尼

歳餘以憂死而不言赴奥州想彼言鏡必博物君子也不能質其所據為嫌伊藤次郎左衛門雖家大町職掌借馬戶籍因顧彼墳別在兩所殆將湮沒乃與卿黨勦力新琢翠珉以表母子蹤由君子之情也余既識靜非凡女又知世人稱之亦以其能感天与抗貞烈於斧質而非以其容色及歌舞之妙也於戲靜雖賢矣唯聞其有母不聞有父然則自幼教之者母也此母而有此女哉今伊藤舉非獨恩及枯骨亦足以激淫懦勵貞烈則大有関名教焉余雖方外乞士亦不敢不稱揚其美故應其需細繹母子口碑以表出如此而為之銘銘曰

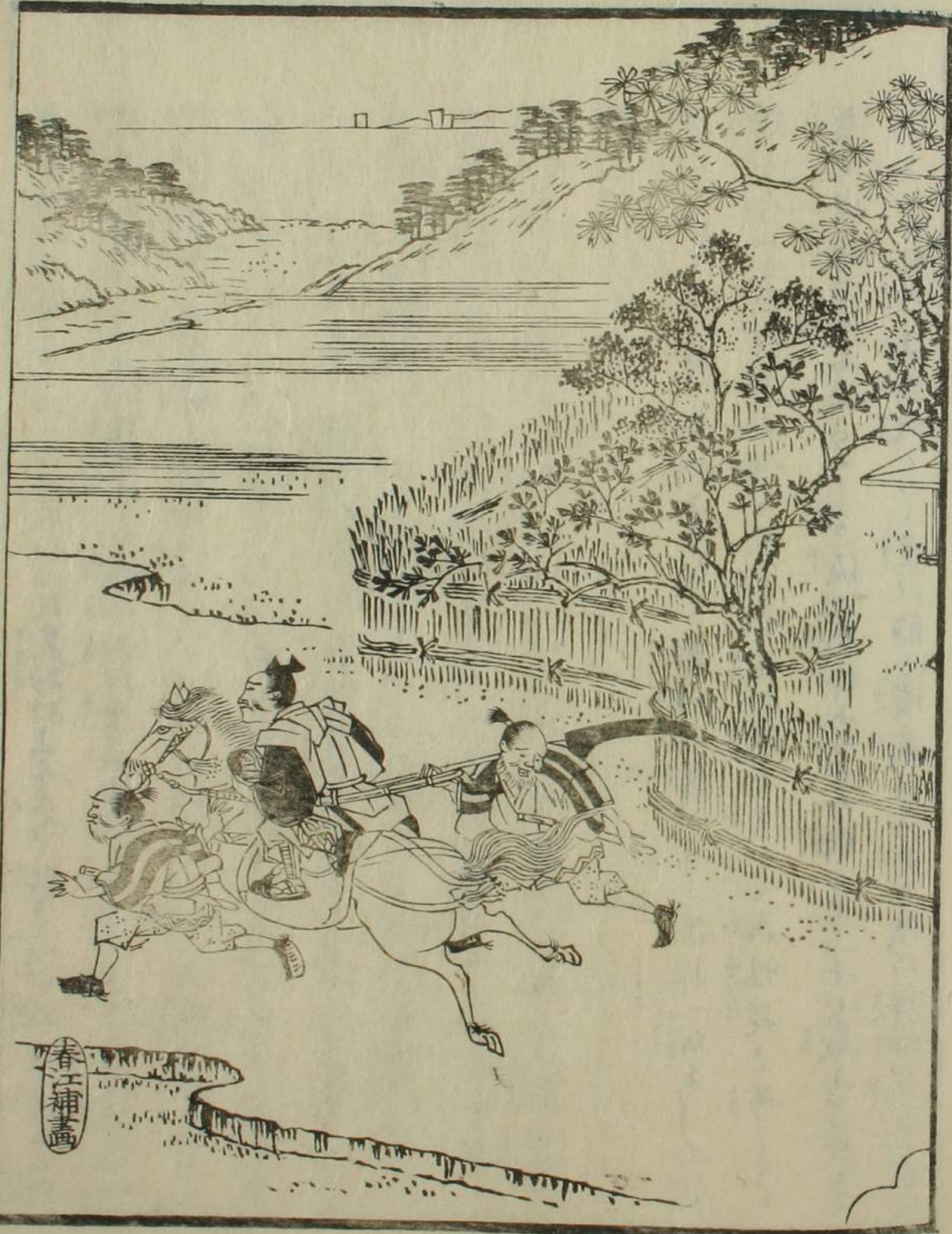
生女如此母亦賢哉骨朽名否千載何衰墓表松古
槁而復栽抗標歲寒垂蔭夜臺彼蒼者天憾不假年
貞烈復性精進加鞭至誠所感豈雨神泉庶證道妙
淤泥產蓮母子之美孰有大焉伊余所惜誰曰不然
然而以女母亦有傳豈可不謂蘭蕙芳聯

研銘裏

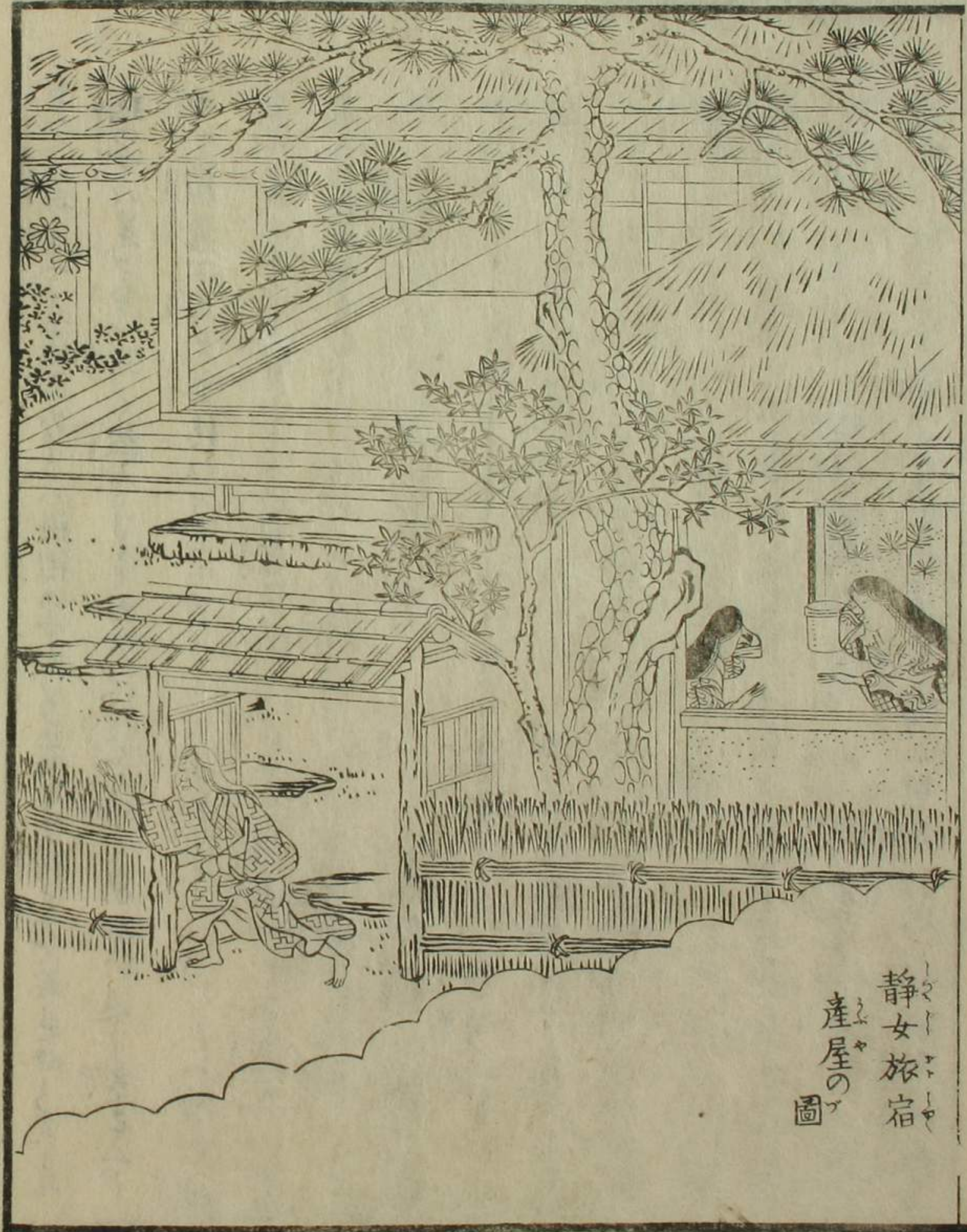
義經代記

いづてかくちの昔に於て人あはとらんやい思ひいふきまや 賢文
又白拍子静と義經の子と懐妊しければ出生の子女子と静に

是を賜ふべし男子たつて襁褓の中たり其いづを將來と思はざらん未
熱の中は是を命と断く然るに生れ程を待く京都に返りきさるべし
中て鎌倉止免並終ひるが七月下旬男子出生たりけしは鎌倉殿
急ぎ先人ごとく宣ひしに所基所関し召き此稚子一人生置ありし
あつちを何事たりきとばあはくは歎きせむいづと助至き非ぞとく
同く廿九日安達新三郎清經ふ失ふべし作付は杉三郎を静産所
に行き小人と若君ゆく彼らせ終ふ故抱き初あせよとの清経たるこゝろ
波しあへといひ静と此言関よりと表と思はる作らね自らささく失りんと
召されし況や敵の子といひ男子るを迷ふ失ふべしやま作らねられ玉乃
様からけ若君をいづての波しあへんと衣に纏らる抱き免拜を限りの
泣叫ぬ新三郎も岩本方より福は涙を浮免く互あら時刻既ふ押移り
く頻に母乃禪師を謹責に禪師恐と泣くふどり子と安達いこす新
三郎と頼く是を抱き取馬に打棄由井邊ふ馳て初禪師の悲この竹草履を



春江神畫



静女旅宿
産屋の
圖

そとに敢て傾きをはりて暮しゆれ生砂れを走り行き遊び戯れ居るに
児童あり有るに近きより唯今馬に乘る男れ産子乃位と捨て捨てるや
見むや問は馬に乗る人の何れありはあれ積る材木の間へ投入せし
ちぞ馳ゆられけりしはそいつの禪師らりとわめしや一をゆくはれ
さし美羅る一嬰兒れを此世の事きとてとれけりさあきて
浦入く位かなりて有るべき事ありはなれりて依宿よそ
アたる日く九月十六日静親子に浄服を穿りり鎌倉を去りて京都へ
歸る御堂所ならび大姫君れを憐れむるまひさるの財寶は
あつてはぬききり

或人の曰文治五年奥州ふをしく義経自害乃より京都へ聞えりわげ
静も今いせふ在りて何うせんとも尼ふ成る名をも再性尼と号し
暫く嵯塚の邊に居りしが後に南都ふりて二十七日少て身ま
りしとや丹後國磯といふ里に静が墳墓今にあり磯の禪師母子に

出生せり所なりけり丹後海陸巡遊日録ふ曰村ありよと破といふむ
白拍子磯の前司れよび静は前れ出る所なり静が塔是ふありと見え
てあるはとれ生國丹後なると明りぬ

牛馬向

淡州ふ来由れをぬ古墳あり其塚の四面本伐植く籠とれ其本郷
人むろと号も此本牛れ鼻穴に貫れ用ふ本形り故ふ或牛飼の男是
を切く家ふかへぬ其ゆへにやういふてを常なる人く向て
あはれ我れ是静なりとの郎みりて我塚の本を伐採る狼籍なり
少々聞く人不審して静とい何人なるや誰といわらり九郎義経の
妻静なりと号し里人の曰志くは舞乃舞の上手なり一さうは舞はり
みふ人疑ひしは左形くいまに詐りたりといふを扇揚りて舞人
といふ郎扇と出せられ牛飼乃野郎扇を揚く舞ひ舞ふ見たり人
感ふ堪へざるなり其中より一人群をよと曰静は前れ相奇と違

者有り〜と聞くと、逆りの支に一首を吟給へといはる。牛飼扇を頼に
あゝ志ば〜案ざる許小又〜と首成りぞく

問人もたかくて静の墓なるに花をたふら松の影れ音

各驚歎して是より静が古墳なるま、知さる是近代の事〜と今を

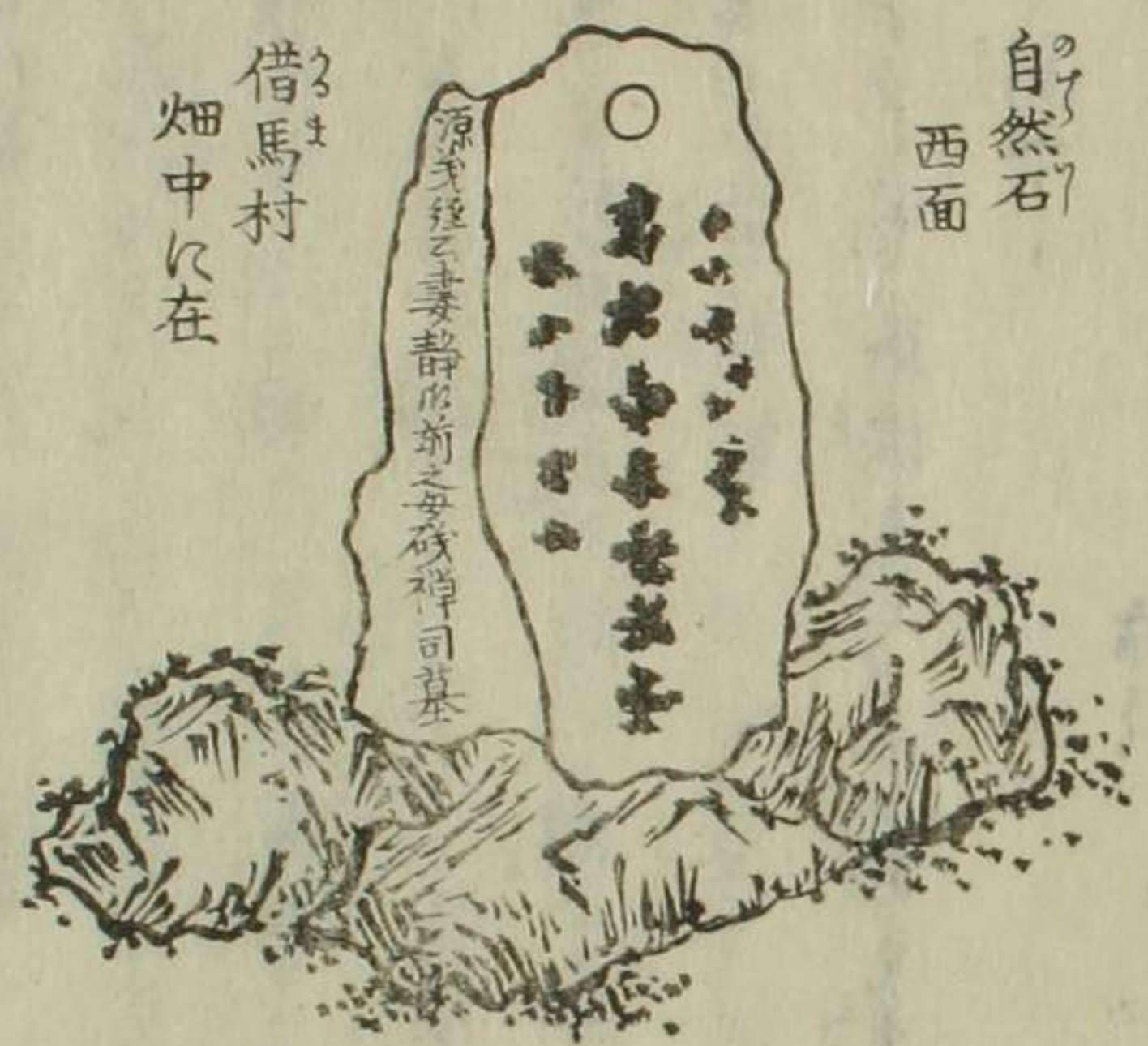
後と聞は〜かの地より行く者も尋ひてゐるとなる

ムロとの一本、僕名あまの京都を小まなマヤナギといひのや、牛は鼻あつてめれ
用此ムヤナギは和木とて、洋本小見違ぬ

右牛馬向の説義経一代記の所見云彼云是の何れを是とも辨（が）〜
猶君子の后考を俟く爰より土俗の諺に倣（幽）言餘韻乃趣（従）い今吾
見る儘に誌と静の塚を松崎村牛立に、菜師堂の後より母の塚を信村
乃畑中ふ古杏一株あり〜との下ふ石碑を建傍小石の碑銘あり、田邊三十歩
許ふ古橋の柴垣をりて界とせり

母の碑

文治五巳酉年
○頓室妙悟比丘尼
十二月十八日



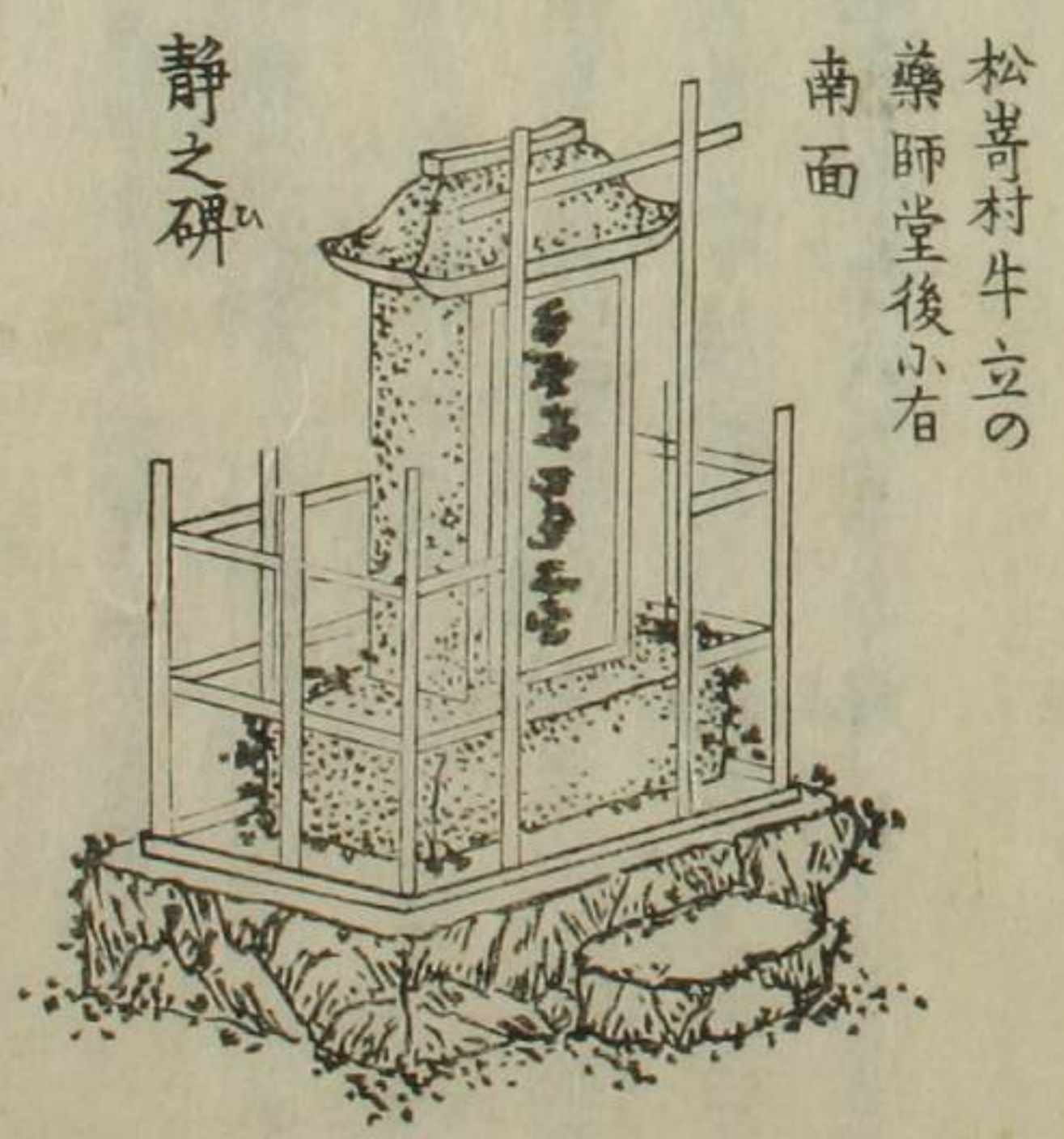
自然石
西面

借馬村
畑中に在

静の碑

勸融院静圓妙止大姉

東横二
文治五巳酉年九月二十三日



松崎村牛立の
薬師堂後小右
南面

静之碑

或記小曰治兼の〜後頼朝義経市中和成らせき多ひ静の前と鎌倉小
召く義経の行跡を尋んが為に鶴岡若宮の神前より〜歌舞あり鼓

三藤祐経銅拍子と白山重忠とれと侍る田雪れ袖を飄一黄竹乃
款を諷つて静か窈窕たる舞の風俗頼朝御政子前も興ふ兼一列
座れ諸侯も目と驚はるるなり

志川やうつゆとどほれりかへ一昔を今にたれとてさう那

静と其頃の園色なると雲鬢花顔春風小芳しを檻を拂く露華
濃なり月を鏤く款扇と雪氷束袖舞衣とれ舞と玉と鳴と如く
麗しうとく深塵はれがう翔うと我思つと上り下り感賞大方るに静と夫と
慕ふの音韻彩と恩愛は清くさあやうとや頼朝口の清胸ふせまり思つた
さうとや落涙まうと舞も半過ざるに座はたらし帰館しるなりと
ぞ閑へ

安大町

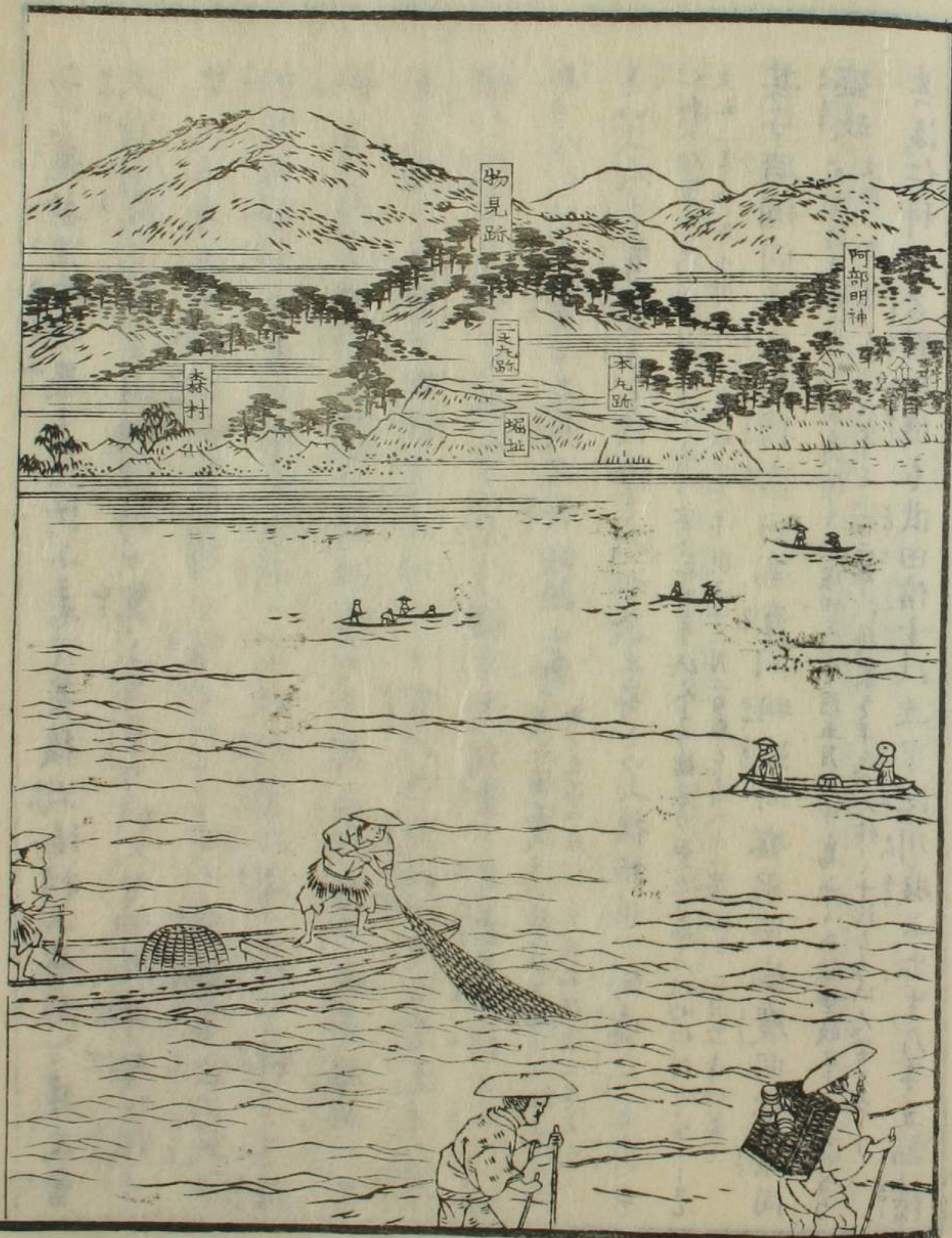
海の口へ武里大町を拾丁許相對して巷とたれ繁昌此地あり
富家多し是より備馬本崎。森。海の口。中綱。青木。佐野。沢渡
。飯田。飯塚。塩嶋新田。十國。大綱。横川。白池。越後界。近九十七里

東西中五里程かりと

仁科古城

森村海の口とつ湖水は
除にあり森の古城と

仁科氏代に住居なり其中室津屋と
人是を築とあり皇極天皇乃皇子矢原の庄司高明親王と云一人後高
根伊勢守と号を其子室津屋是を森和泉守とつる旧俗傳數代の後
一條日向守より仁科の領主此城に在りやなり仁科家と云安曇
郡に位し九十六代及ぶ其中に姓氏の多まる人此所を領する時
と皆在名を以仁科及と稱し未とり館乃内とつ所を彼居館なり
一今れ若一王子の宮に此廟あり一条家を醍醐天皇に皇子若宮親王是
を一条御理太夫と号を子孫數代相續せるに依り此處に一族家臣屋敷を
構(要害)を築れ住り其後奥州乃黑澤尻四郎正任とつる者押領して此
城に居まり今是と所の者謀り安部貞任と豊也貞任一族則任が子孫
に位し今此城地安曇郡の
官に北より社あり
安部本曾義仲の二男清長八巴乃前の腹より
山城國に誕生有る一所義仲討死の後樋口次郎手塚を府守と抱



仁科本城跡
 海の口 東西三十丁
 南北三十六丁
 本城の片と浸きり
 中細の湖
 青木の湖
 此三湖北へ
 つらんき



春江補畫

少て鬼無里安吹屋といふ所小来て其後大塩村小屋形と建本曾
大野田皮と称し山田次郎が尊ぶなりなり大野田皮軍勢と催し
安部五郎丸と討亡し首を持し鎌倉以下で右の意趣言上乃死し
將軍頼經公上意に本曾義仲の壹岐判官知康が二院と諛し子孫
絶るや存ざる處に一子有之故孫重なり其上今度の忠節雅勝計安
曇筑摩と本曾が本領なり大川三十貫此所宛行りてをまより妻
状を賜り上洛し系内一原信濃守源義重と名乗り仁科の城に入
りて六代の後實子なり故孫瀨孫三郎 是を清盛六代の孫なりが勢州よりあり孫
成と云ふ孫位して在名授休氏を名乗る
といふ人を尊養子といひ依り仁科孫三郎といふ後孫正少弼盛忠と號し
仁科ハ伊勢平氏の盛の字を以て通り字と云ふ半山人より始まり盛忠其四代此時仁科を領し是
文永二年癸卯十月より後意永十七年庚子十二月二日卒を壽八十二歳大阿闍梨松寺に葬る
其子盛國同盛房同持盛同盛直同明盛同盛國同盛慶同盛康同
盛政 家督後武田家へ叛心あり依り永祿四年辛酉五月川中葛やうを誅奪政三十二才の時あり
文明二年より永祿四年と二百二年仁科家を平氏の人修り十代よりいふ男子あり
其後仁科の名跡相續と武田信玄此五男池川辰小出生乃子五郎清

明と云いし人を領主に定らば後藤廣守信盛や号しける位登り勝頼
没落乃時高遠の城小籠り信忠卿の爲に生害せり天正十年壬午三月
十八日あり

伊奈郡高遠の城西山小仁科五郎此宮とて墓の標有る

○吉木の湖を過り曠野あり佐野村の内かく仁科街道なり佐野の二
僧の塚も往還乃左側小有る傍に碑銘を建高廿五尺さうり巾二尺
程乃石なり苔むして文字鮮きうに裏に二僧の字と彫まり

西行遺集
永曆乃末八月の頃志をけ國佐野のりりて過侍り一に花珠小面
白く虫れさきく啼きりて移るごとくゆりて野色よさく
一侍らに玉絳の初く道の外ふさう茶かさふとをりて足やる
ありいろねる道うらんとやうくさく花ありて侍るは前管
女郎花と手折く唐むきびて居る僧ありをい四十あまり五十六
もやあやうむとて前よけりて現孝をうりぞゆりたる誠り

あふとをきかたる人ふ侍屋の内を見入侍色をみおろく房に作まは
まづくに帯ふく札を法をうり薄れやせりよは

前巻の
あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

あふと

まらねたる秋の世風乃いづれも夜啼くわかれ夢のさやもあは
らうちやまらちと思へをかるるの志とわかれ露もまをたをのう那
露乃ゆきつゝに織てよゆらえふ秋風ア事そふせはくをば
夕さればはれ秋乃風乃えふえわ杖とあるなみこか申
女帝花咲るまがきれ秋の色か海白妙のはゆきかえららぬか
とゆきをつきく産禪一結へて御よまらるく尊く賢く何とぞ
れんそ何ゆより愛くも来りぬよあやとりはるまよるとげうり
あふと其のら何とぞいひうらも終ふものぬらけりたまらぬに
目もかへよまが名残ははらせよとこなりくつゝもくほりけりけ結
縁せぬらく麻の衣とらむの庵もまらる生侍たわく西の方へあや

出きれば定にきりた山あり山水清く流きく岩のありさぬるにめつ
うふ結ふかくとも是ぬいさくとをさる程の所らう河乃水とたう結行
はき丁余来ぬらむととよあどた本乃葉をば一ねけひてむせ
らうらにきけらる御もそりきる愛ふも又々人おとけけせ
思ふ再抽らちらはらぬいそきよりてえればうはらへ久たて結する
やうにうきき結へる人たり本のえに紙ぬれを付らぬら
紫の雲まのあめらうらなれをばる月と雲の月あてさみま
とつし奇乃うら者ま表にぬれく侍りて上の層乃同行よとせとあひ
ひそたゆくまづくといひて表にとせとを祝引よせてかくねん
速ひつるんをを照らさ一月もあやなくままことけけ
とかれ終りて葉と持たう眠ふやうにくをうらまあはゆらくかぬ
しとて袂にうらはきねめけぬも甲斐ぞ侍らぬ又山蔭に侍らぬ人
をうらあひとると思ひくなくく走り行く見侍らぬか人あはまじ



佐野の二僧
終焉の図と
写し傳うて
利忠
その人乃ちと
きこうのてや
恨多き
位野の弟葉の
あゝきえし

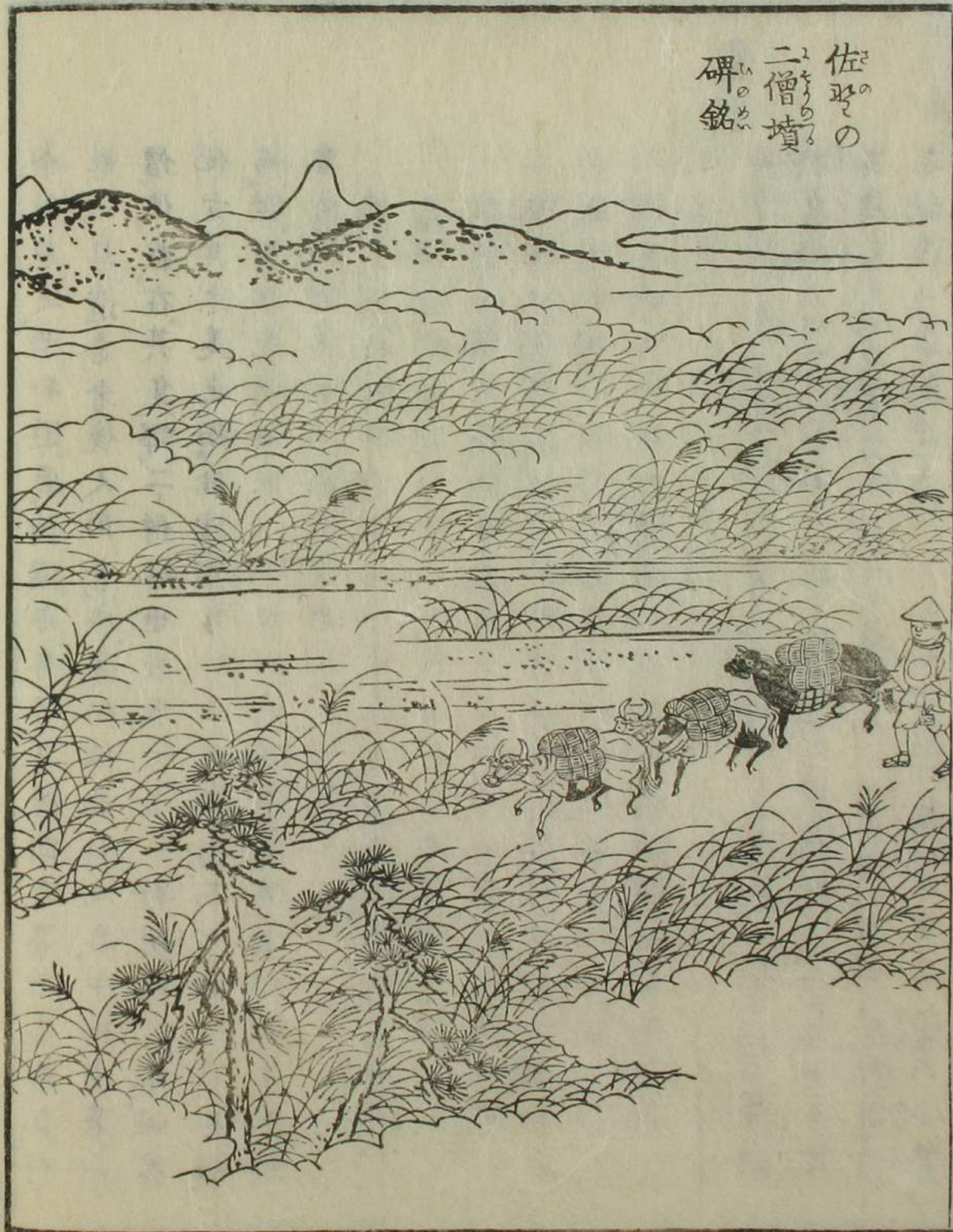
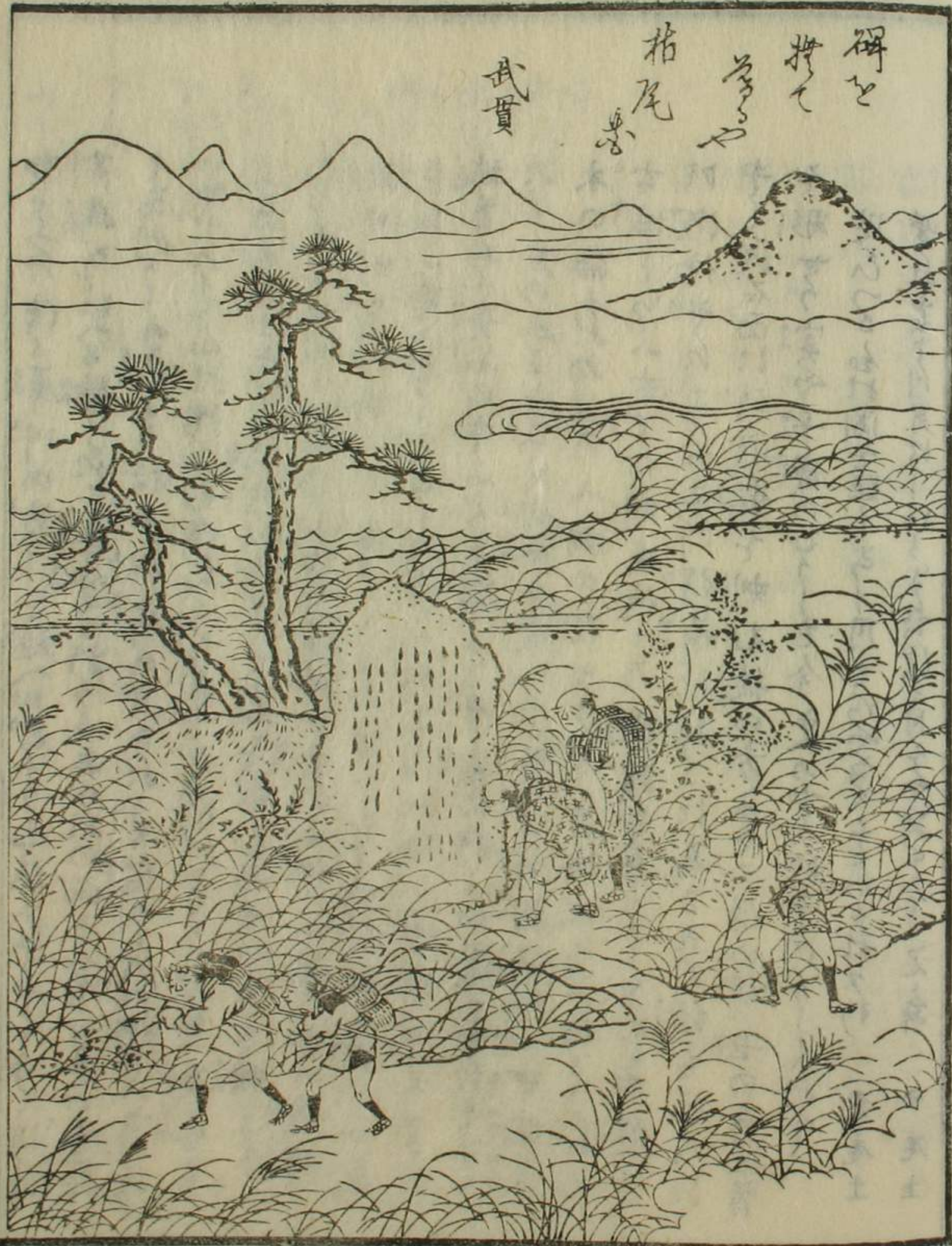
わがゆき居てまへに扱有んぬ小侍の孫の如く形をなすむとねを
 ひたすらして敗ふ焼まゝとを侍りに知りゆえなりうりうりうりうり
 居れぬものたかくさうはれりて涙をのこしおぼへりて泣き
 終ふこと久く後煙と成り春の野色の如くされうりて行てまゝ
 うれむかゝるうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
 此のく焼あぢう其の夜を野邊にとほりて終に念佛して一仏淨
 ちんと誓ひ侍りて明りれば菴乃ち終る取く泣くまゝ侍りて終
 ちうりける身外生死の如く世に在るは有がを侍る久くまゝに彈
 傍をいぢりてるもあぢう奇しくまれまゝに在るもあぢう奇しく侍り
 所を侍りてまゝに在るもあぢう奇しくまれまゝに在るもあぢう奇しく侍り
 見んを何して志りて其の命をもちて人里を侍りて又持行りておぼ
 そむのく度く國を侍りて其の命をもちて人里を侍りて又持行りておぼ
 かは人ふりまゝに逢ひてまゝに下略

西行撰集抄記信州佐野二僧莫或曰信州有三佐野一在安曇郡一在高井郡一在更科郡三處皆有西行遺跡未知孰是故余住太澤時佐楚夫老請制其碑未敢為之迨住長因乃得托其旁近寺院質之蓋高井更科二郡佐野素無西行因由然又或曰方西行時未聞禪宗盛行都鄙然稱禪門僧可怪也且西行所記數首和歌皆古哥也然西行稱為彼僧所為而賞歎之又可怪也余以謂若據此說波一部撰集抄乃烏有先生作而不足信乎且撰集抄記佐野風景畫面曰不及今觀安曇郡佐野村雖有山嶽不甚秀異雖有川澤不甚清麗雖曰稍入溪口頗有泉石之勝非可以謂畫圖不及者狀而其艸間微徑今不知指何處言蓋六百年来山川陵夷而失舊觀乎將人物滋茂所謂草莽亦成畝畝乎然今路旁古墳祀則崇焉祀則驗焉土人稱為二僧之墓又有清泉冬溫夏冷稱曰西行洗足水共古來口碑也由是觀之所謂古墳撰集抄所記同火闍維之迹也顧方西行時雖禪未盛而天台家亦僧稱禪則彼二僧蓋習于台家之止觀者乎

余孰思之西行遊歷諸國每有所見所聞所感輒記行卷以具遺忘者後人附會成書以假西行之名乎獨庵著二僧傳載在其集譯二僧辭世歌歌七言二句欲以宣布此界他方其志美也而唯據撰集抄點綴模寫而已余雖非其任而樂發揮先德幽光性也故略討論耳同所及以授里人刻石表墳後有君子庶覽觀銘曰

信之為國險惡似蜀山川醜靈世產異德佐野二僧撰集所錄修證淵源不可得測接心心觀忘機靜默精明在躬物臻先識曠野蟲鳴毒其秋色來訪者誰後更堪囑後容賦哥寂絕氣息脫其皮囊如夏被褥枯骨寒灰瘞委荆棘六百年来雖無銘刻今表安曇以為芳躅乃深志城七十里北邑有清泉湛如碧玉傳云西行嘗此洗足

をのこすのちをてふかたをきけむとておぼく記しけり
 撰集抄の古くを思ひ出さるるをよめよの玉佐野や人山里み東
 石唐も乃誌を思ふべしや尋るるにやゆりりおぼく思ひ出さる
 小秋も乃誌を思ふ二夜此月をふりて下生坂の里より管乃小笠



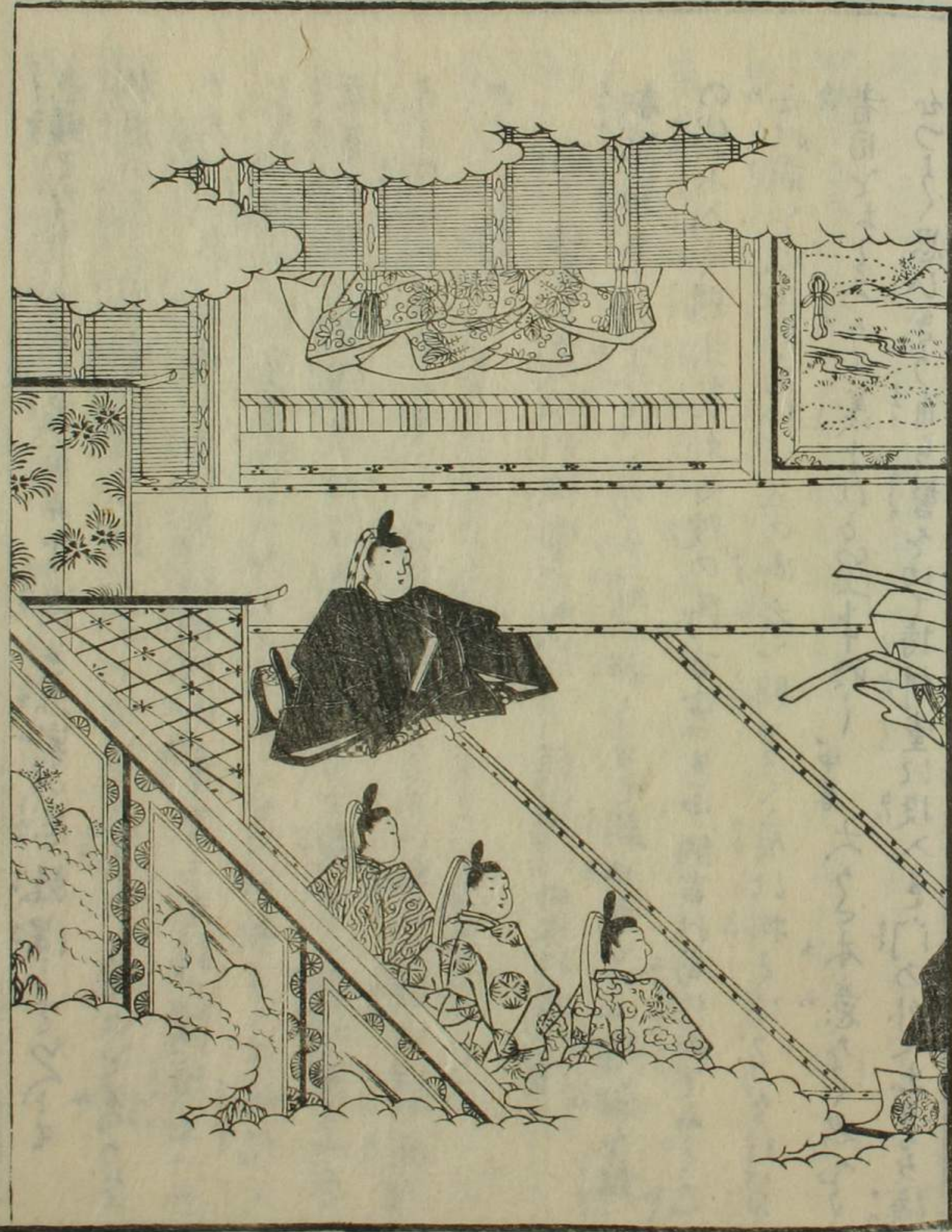
かきつけけり犀川の渡りて越入田より山崎小坂までゆくはに
新崎をいりる谷に於て拳登りおろしきれの高をあらはし本
もあつた九素より杜多杉のたすれども宿るはの何といふに
いそぐれく山に於てふゆのきくおまふといはれりけり
とれよりよりく大町にいらりて宿を求むる八日を晴
ひききと所をわらわはむききとそ冬央に他して西の方
越中加賀に渡りて参りてふれ雲をかきお影影小映る
色おしゆゆをくそあはれもり新に北海に渡りて所
塩かを本本の市ふらより牛馬の行ひ道にせれり
おり左の山よりくぬ水を流し三つ並り所謂海北口中細青
本の海にゆゆの八湖の侍より其湖水をうけく森乃
古城といふ有仁科氏代に乃珠蹟ならり日か多傾く
以流伝母のまゝおす河原前に流るに高さ五尺程を二尺に
きく石面に碑乃銘を刻む後の方より二倍の詳世の奇二首
を彫せりまや千歳のむくも今更のやうにきりく形
迷ひつるおれ園を照らす一月もらやきかたれりわ
紫れまきり月よりけり月をわらりてくは

東庵土
西庵主

窈窕より東庵主悠くまて西の菴主千載の馨名ゆる草野乃
露お抄りて撰集抄に載りてゆり誰り是を傳くまらん
れは西行法師をいりる人きりまれおききりては
唯文房をきり後鳥のうげふ徳をけりみ才をわけて世は道
せりおりるなり下略

北越 其芸芸房

抑西行上人ら鳥羽院乃侍時左兵衛尉憲清とて北面お召仕いまし人
出家の後西行法師といふ彼先祖とて天児屋根命十六代の後胤鎮守府
將軍秀卿九代の孫右衛門秀清は孫康清が一男なりそ前の家小傳
り武藝お答を施し養由が百矢の騰差を習ひ張良が三畧の書を究
む凡文を好てら管家紀家けきりて隠し螢を拾ひ雪を聚て身
と照を嫌りて管弦の道も暗くど放り我國の風俗をいりわ歌小至
まくらおら本艸小を咲くお鬼神の心をわらり事貴への歌傳
しと恥ぢりてばされ朝恩他小異りて急を延尉めりたるるべき侍氣



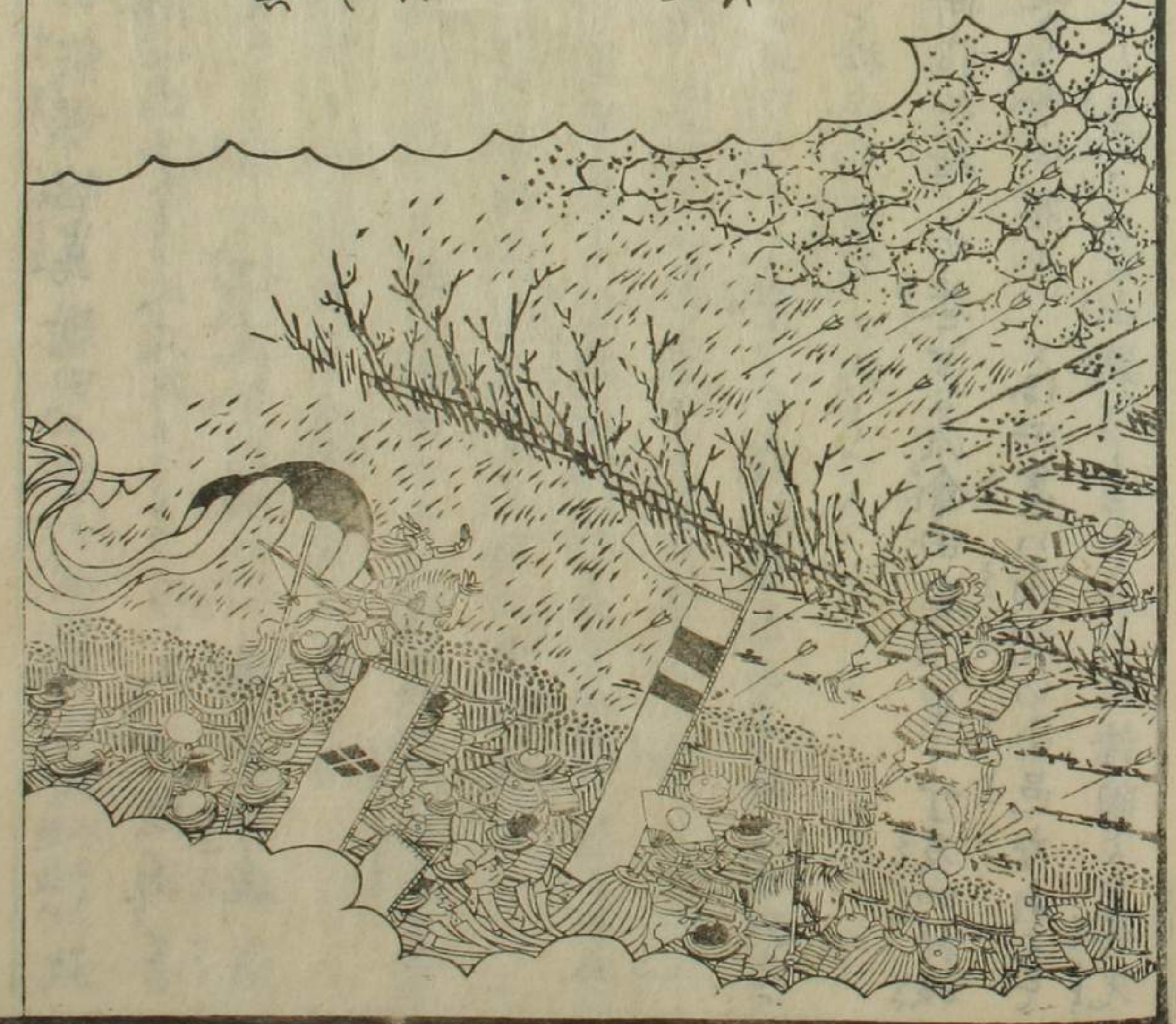
佐藤兵衛尉
 憲清
 殿上
 御款
 つま
 ゆり
 図

色頻いろしほなりしともも兎角うさぎのつらみ十と遁にげと出家しゆけの志こころざし深こほくとりとも
朝あさ恩おんのあま恩おん愛あひれ捨すけるたら案あんト煩ひく空くうく月日にちと送やりる
大おほ治ち二年十月十日に以もつ鳥羽とりば殿のに侍まじ幸しあならしを終おひひ障子しよけ画
ども觀覽らんあるに室むろ小こ優ゆうなる清氣き色いろあく其その以もつの歌よも達たつ經きやう信しん匡きやう
房ぼう基き俊しゆん并ならに憲けん清せいをて成なりるもて此この画ゑどもと題だいやく各おの歌うたならぶこ
よ一作さく下くだささる中にも春の雪積つみまる山の禁かぎ小こ川がは流ながる所画ゑ
するに憲けん清せい 此外色々の繪をせやく都て十首をつくりしなり

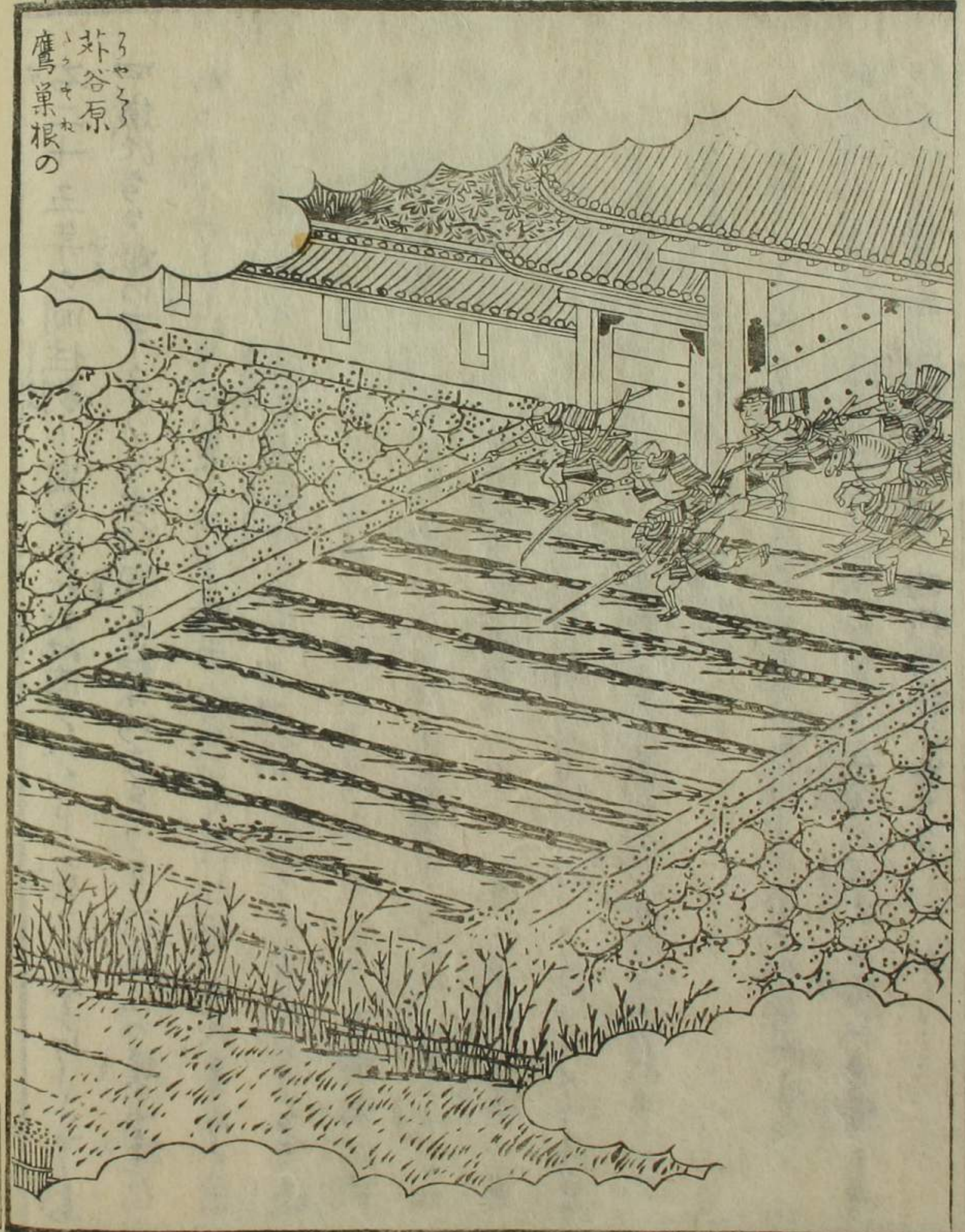
ゆりほとく鳥根ねの深雪ゆきをなり清滝たき川の水みづれちる浪
獻けん感かん斜しゃるば憲けん清せいと口を頭の辨をりて朝あさ日ひ丸まるく御劍けんを錦
の袋小こ入いく賜ふ其外そと女に院いんの侍方かたへ召さ中納ちゆう言ごん此この局きよくの兼まめくこ
女に前まへと以てかは絲十五ごの御衣ぎと賜まく肩かたに掛くはりたれ見
者もの目めとおどろり羨まぶべとの上半はんぬい 中畧 大おほく本意いなく思おもへる
をつりく思おもひきり自ら髻を切て持佛ぶつ堂だうに投入なり門の外の外へ出でるる流

石いし二十五年にの間ま住ぢゆう馴じゆん一い宿しゆくをいれ内へいれり契せきまをかつける也なり
四よ歳さいにある娘の事々々思おもひ個を種ふらるる年としに西山の藤ふじ逢あひ
知しりたりける聖代のに走りのき曉方は及およぶはじり二十に五ご葉はめく出
家けととぞんきり法ほ名を西さい行ぎやうといふ 中略 かくく五ご十じゆ余よ年ねんをたせ過
し若人に一い夜やをから八億ひやく四し千せんれおもいありあらきとも懺ざん悔げ六ろく根
條じょうの為にも三さん十じゆ一字いちれい言ごん葉はをい敷しむらの悪心あくしんを止め佛道ぶつだうを成すは
媒まひたりや觀かんじて東山の邊へで雙林じゆりん寺ていれらに菴と結び親會しんかいの窓
の前まへへ三密みつれ月を友とし攝ちやく取との侍途じとを待ち明一めい暮ぼりり侍じ堂だう
れみきりに櫻を植えるをとりきれみ此この花はな盛さかに釋迦じか入に涅槃ねはんれ日二に月
十五ご日にちの朝往かう生じやうと思ひくかくもせ
祜く々々くい花はなのめとみく春のさん其きらくれ乃をら月れきる也
既すでに此身の如ごとく建久けん九く年ねん二に月に十五ご日にち正しやう念ねんに西方の向むかひ合掌がうしやうとて
往かう生じやうに素懷そくわいとぞ遂すいにる 下畧 西行物語さいぎやうものがたり

合戦ハ天文二十二年
 八月廿九日時の城主
 太田弥助ハ道灌ノ
 一族より小笠原に
 属して七百貫文と
 領も甲州より責討と
 つとも堅固の山城を
 容易く落さるゝより
 武田氏家臣本倉丹後
 とつふ者武畧と運りし
 竹束と横へ仕寄をつけ
 城階へ元法を夜日ら
 して落城せり是より
 竹束をりて城攻の要具
 とかきつりし哉
 是を以て名將の下に
 今もあると滑りるんじ



外谷原
 鷹巢根の



是より以渡飯田飯堀塩嶋新田千國大綱横川白池越後の代
経く越後糸魚川へ出るなり又大町をとり右へ入り戸隠通り善
光寺へ出ふとちと常れ往還する経べ引返して本街道
杏本より此順路を記す松本より岡田宿一里なり

松本とより中原村松岡村を過下岡田の左に岡田此神社とより
鳥居より並本の松岡り本社迄七丁程なく岡田宿に至は

岡田 四丁程相對して民家多し出放し婦人と改番所有は松本
より是を並置芥屋原二里半此間をあざ坂といひ登り三十町下

二十丁かりや原峠といふなり十丁登りて右に茶屋あり峠より三町を
是より猿ヶ馬場迄と松本御預所の内といふ

新屋原 間の宿といふ三町程相對して巻とより會田宿一里十丁及町村板
場鳥居出と過り會田宿より此邊は山間の小邑なれども
なれ風俗質朴めと堅實なる山賤は多くつとひ諸國より善光

寺来る旅人引まきしに粟れ強飯といふ郡谷原の名物なり

○鷹巢根の古城 刈谷原より五六町西の方にありむら海野小左郎幸

継の五男刈谷原五郎城主なり其後太田孫助といふ者居位を

了太田道灌の一族なり弟共三男 文明十八年鎌倉あゝ道灌討死

此初當國に落来り小笠原小屬一太永三年癸未より當城主

半り七百貫文を領し小笠原家あゝ一の女身あり此色十六ヶ

村と領し武功の者なり天文廿一年武田此軍勢小縣郡よりせ

先入り八月五日より合戦あり甘利左衛門が手に米倉丹後とい

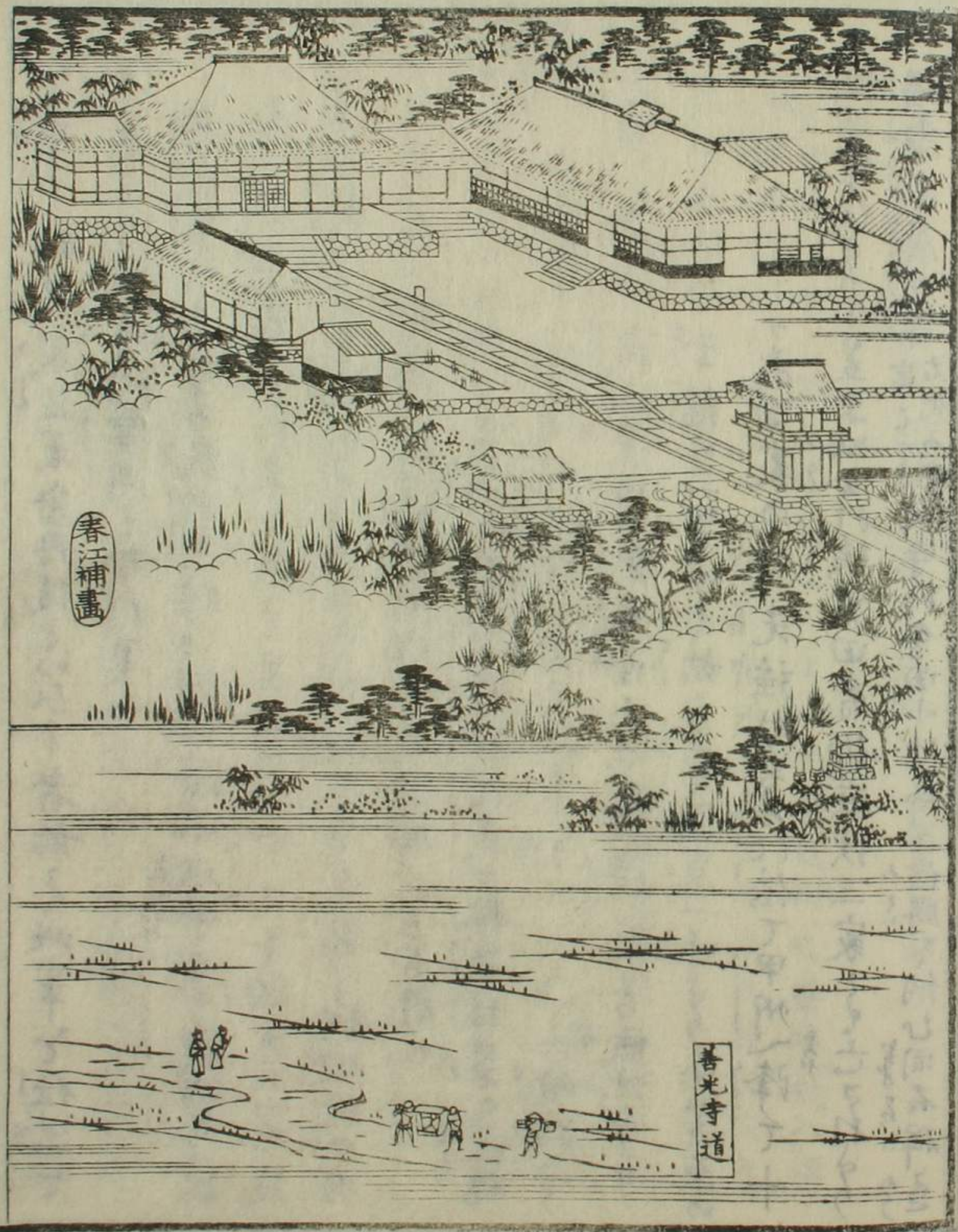
者武畧を運し竹策と拵る仕寄とせし故小日あゝむと

城際へ取詰り城主是を追拂りんと九度まゝく突て出々とい

後詰りたるに堪えなく同十三日未の刻に城を拂り討死し

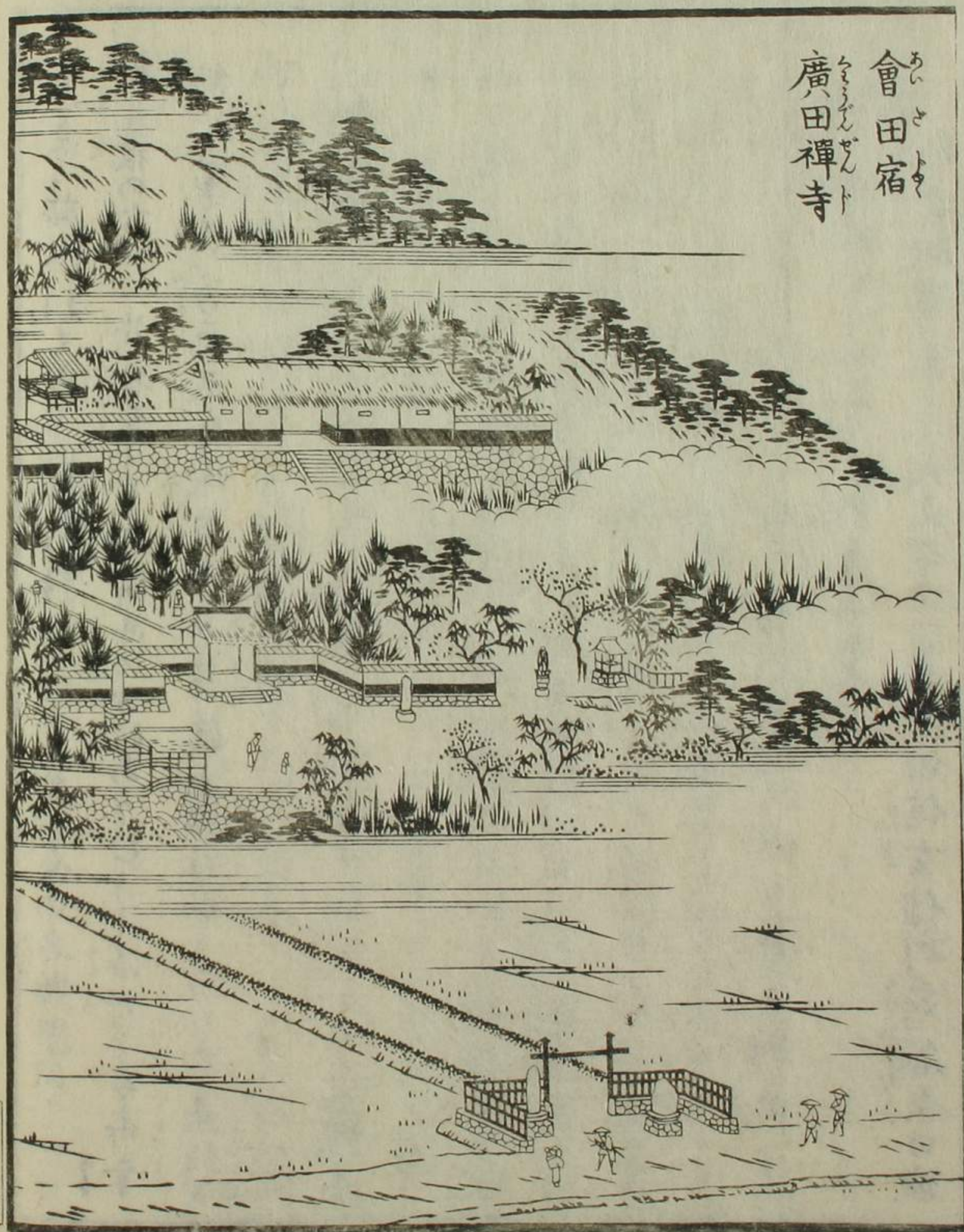
終め洛城せしなり 竹束の支

往昔此事なり天文二十一年武田信玄信州前谷原の城



春江補畫

善光寺道



會田宿
廣田禪寺

と責一時其家臣本倉丹後といひ一者始く此事と仕出せ
て是より城責れ要用となれり

那谷原に邊なる執田光村山間の澤小水中より火の出る不
あり生立青芦の末と折く其切口に灯火を附きべつ追
き火地るといふ予いちと試みざれば慥なるに伝知に田沢の内
三石といふ所并に生坂村の内ありて所ありとぬん

會田

七町程相對して巷と云ふ本陣横内氏が林泉佳景之乱檣
と云里十二丁此間立時登り二十丁下り十八丁の峻路あり
北東に虚空藏山見ゆ則會田小次郎廣政の古城地なり
廣政と海野幸繼の二男あり始に當國危一味より小笠原の
旗下たりしが武田家の鋒先強勢ありに依て甲州へ降て十
騎の軍役より小笠原に後會田者柳麻績三家とも亡されり
福壽山廣田寺宿と云ふ此寺に會田小次郎の位牌と納む同石碑あり

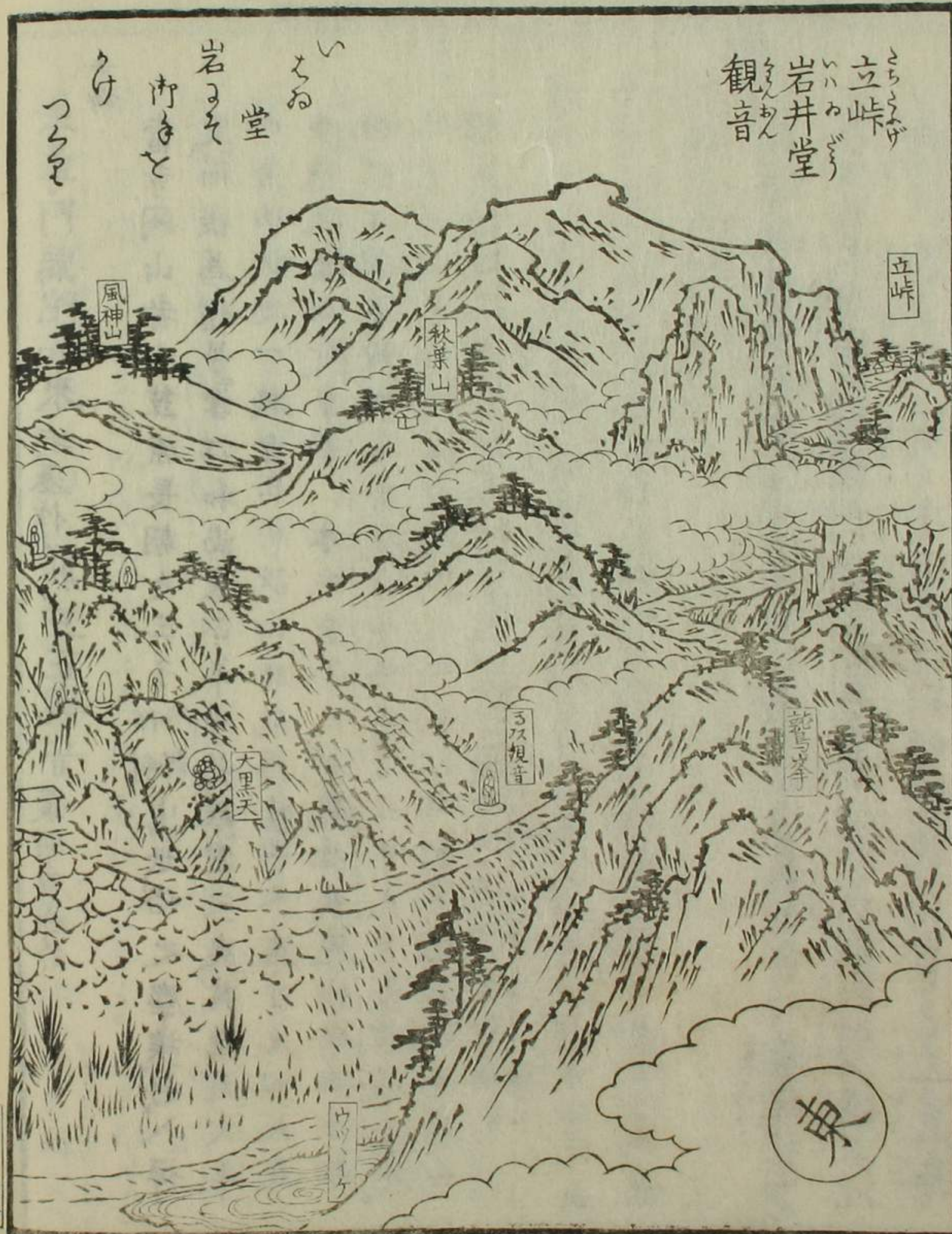
本尊阿彌陀如來 行基作 前立正觀音 最明寺殿作
寺傳

當寺閑山者小笠原長朝之三子俗稱出世世俗之塵埃好入禪
定而後為僧号雪江和尚永正年中始經營之矣其後天文年
中真田氏之一族會田小次郎廣政再造營之矣乎元日知見
寺後改廣田寺皇都 本光宮子之所處也矣連密曲曲乎松
林盛茂樓閣鐘樓高秀在其中福壽者山号也乎青櫻樹着花
流鶯頻轉夏綠竹垂枝清風自到秋松林移月露如銀冬前山
積雪恰似玉四時景好曾無絕矣乎當寺什宝等先年燒失
是より五丁行て右側弘法袈裟掛せとて一古松あり奥に無量寺と云
寺あり又二丁行て右岩井堂村ふ弘法大師の古跡有り右岩井堂といふ立
峠の登り口なり

縁起
信州筑摩郡會田に宿岩井堂に當國二十番觀世音乃靈場あり
はまば天平勝寶の頃行基菩薩具戒後學に後觀竹の便と云
幽寂の地と云ふと所へ寺遍歷の折此山の端に當りて三寶鳥



谷をみる
うつ
あな



立峠
岩井堂
観音

岩のそ
内と
つら

乃聲響ふ仙法信と呼を聞不思議の思ひと好く給ひ声とあるふ
分登つたあへ地系は撈と千尺の巖嶂潔く松杉森と茂
又眺望究る前鷲の峯高く峙と麓に現の清水と洒ぐ誠
寂靜安樂此靈地多事所求れ道場爰ありとて常く杖を留めり一宇
の草坊をむきひ法多自千手観音の尊像を一刀三體して造る
好ふまより星霜を経く高野山の閑祖弘法大師入唐奉終て帰
朝の後當山の宅に修し是は仙神迎臨の靈地鎮護國家乃道場
と感歎終極し法修法ありとられ則大日れ尊神を岩上に凡
刻して六師極上の跡供養塔婆今猶存と西に窟あり雷
神の社あり大師惡魔降伏の所あり又百番乃觀音尊と石像
あり此所に勧請を岩下れ清泉を大師加持水とあり世俗眼
疾を洗ふ者絶くは昔と香花堂傾の由緒ありやとて天
正の兵乱ふ其印を失ふ今僅に其法燈を挑ふ而已

此峠に掛茶屋二軒あり兩側に有る嶮路十八町下りて乱橋に至は

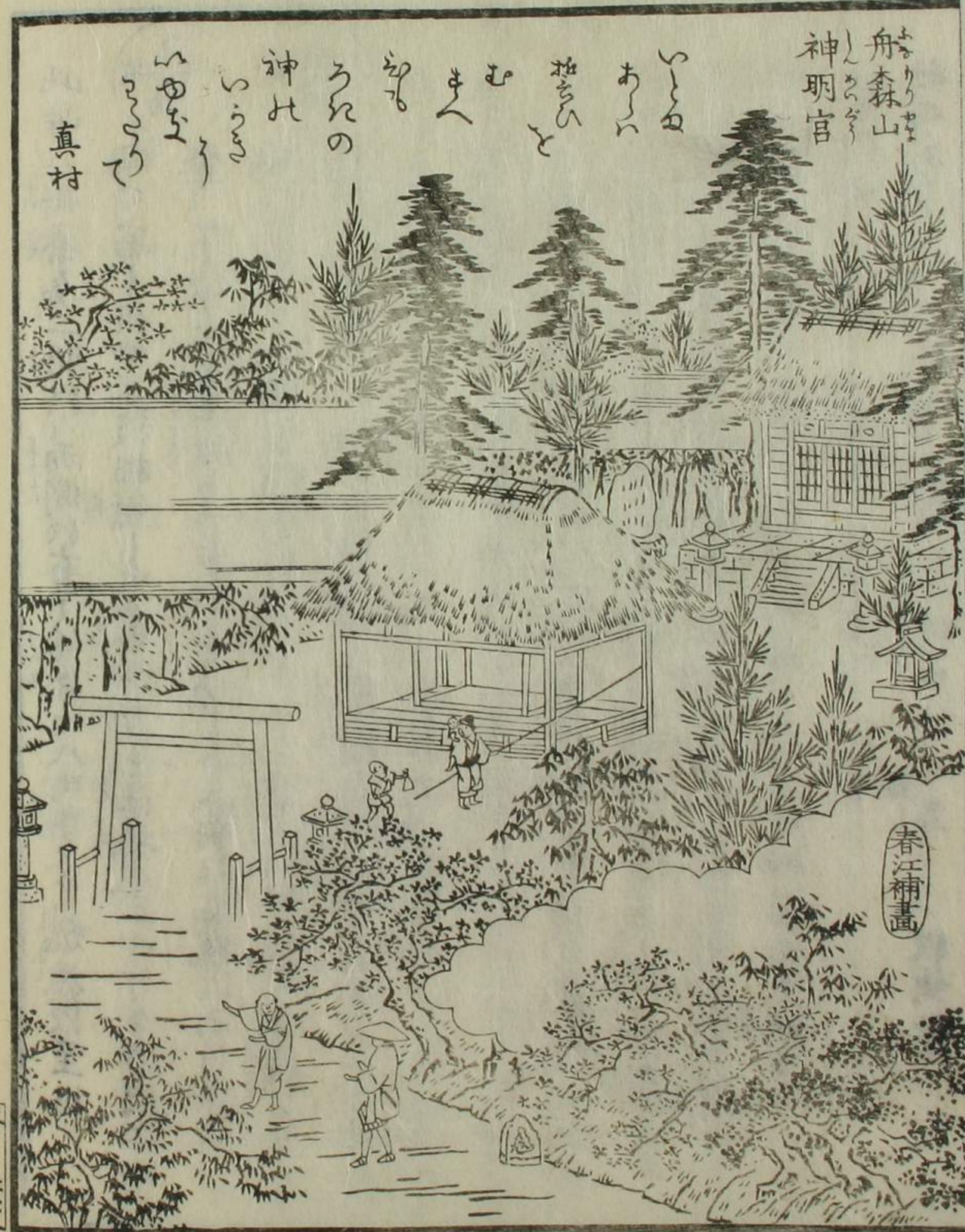
乱橋

間の宿より四丁程相對して巻をたて法橋へ三十丁あり内二町
登り廿八丁下り平坂あり是と中峠より南に古城山あり

法橋

向此宿かり法橋と西条村の小名あり四丁程相對して青柳宿へ三
十町あり未申の山小古城地あり鬼熊左衛門尉とあり人の居城
ありと云西条より左脇道に入て別所村の内小明礮此出る岩山あり懸
橋と云岩石の面を蜘蛛の如くはらひとて懸を挿る人所に見ゆる
かり仁懸村の医師雅名富通門真村が家に懸ふ其傍なる舟夷山に神
明の宮あり其より嘉永二年に始く當國の内七箇所へ伊勢より
勅請あり其より孤山落松と神寢て夏本立生茂り雲小一艘の大
船小物を積るるべき形容かり神射と天照大神春日を祀る

社の側小 位は 鏡 吹末 仁 熊 葬
新碑あり 橋社に 花れ 代 峰の 熊 葬 ね教堂



仁熊山の古城地を村より東の方にあり青柳伊勢守持塚なり同
 近江守清長の尊に仁熊何某の者住居の地なり

富田門真村俗稱官澤はつら頂霞石と持得して六種を授く
寛政右工門

細る物々粟粒乃如く大なる物の豆凡如く甚大なる胡桃乃

如く何きも雪白めて圓く其悉く丸き始より此形なり

累年昼夜俱摺り磨き終ふ圓形とされる又悉皆雪れ

ぬるは是又年来熱湯の内に揉きて色と変じらるる一実小一奇

事なりむろ其奇麗尤愛まぐ其取得し所れありとて聞ふ仁

科の奥高深川乃水源澗が嶽の麓仁熊村より十五里計小湯股澤水股凡の

二谷あり昔此温泉の浴乃隙小籠を打んとて獵人を具し核道と

登るに地獄谷といふ所に別湯股沢乃奥なり煮上る熱湯中

小粟も豆も白米も見るも数々の砂小石を吹上る事

所々に蟻の巢の如く傍たる手比乃石を踏く木の枝を打折足



雪の
 教百
 年
 径
 化
 千歳の
 後
 水晶
 玉
 希
 細末
 明
 如
 盆
 多
 たぐひ



湯
 股
 澤
 氷
 霰
 石
 を
 採
 る
 圖
 又
 或
 寺
 に
 て
 教
 十
 植
 本
 体
 小
 色
 の
 本
 と
 枯
 根
 に
 雪
 れ
 如
 く
 砂
 と
 盛
 る
 見
 る
 目
 深
 く
 何
 ぞ
 住
 侶
 曰
 仁
 科
 の
 山
 幽
 谷
 何
 ぞ
 住
 侶
 曰
 仁
 科
 の
 山
 幽
 谷

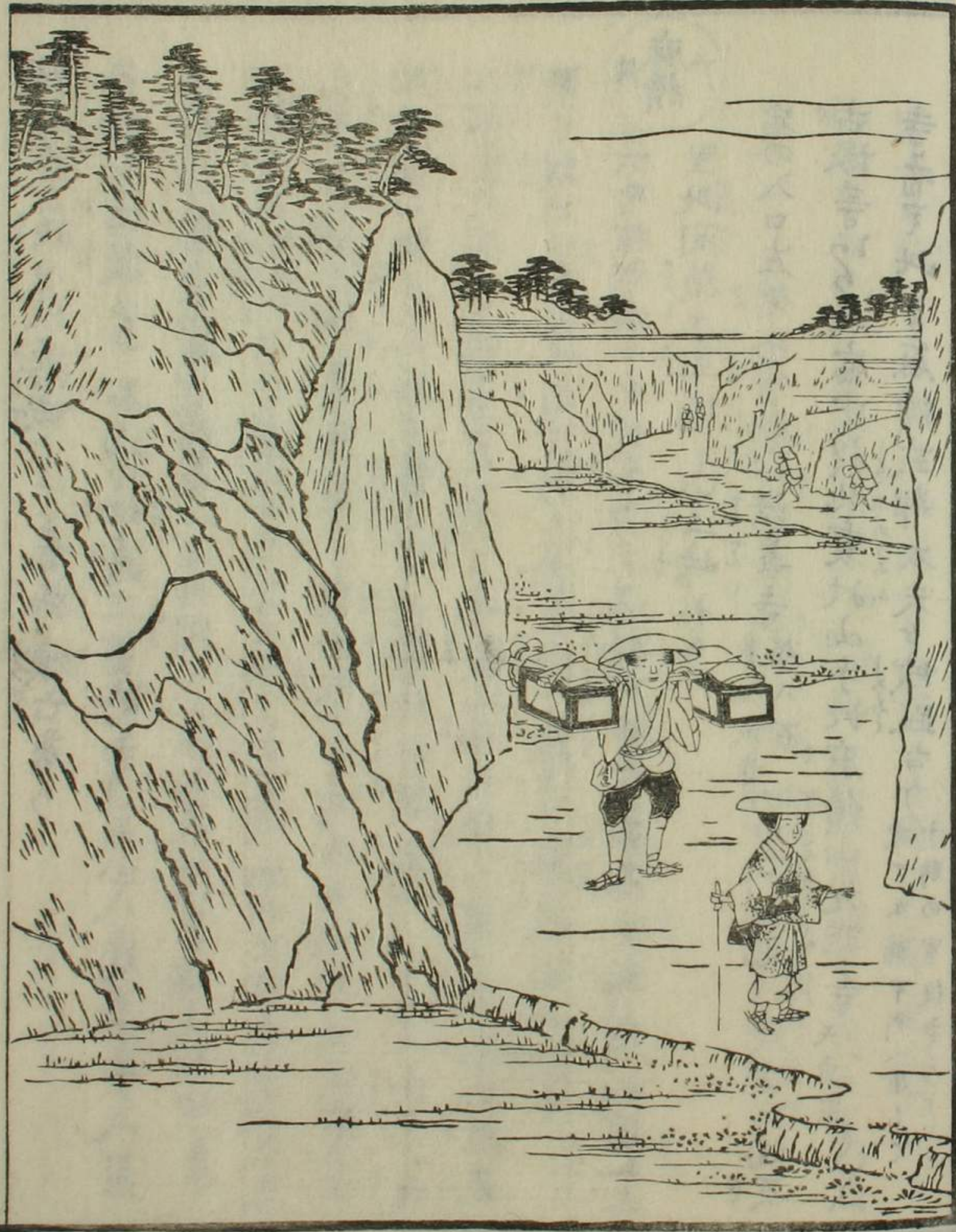
香江補畫

代に渡し本の皮を剥く七となり梢にまがらうて山よりとて
きり其湯深きにあつ福ももろ過くい足を焼ゆ人危異の
思ひとなり作りぬとぞ此谷三里程流せ出く水股小落合ひ
淵川お入る水行急流あして石を研が如し
又水股乃奥も北に連る岑にあり富士の侍釜の如くまのち水
氣あり是を不帰ヶ谷とて信石興石とくいんくしツウ石の事なり
多く有る其地へゆく鳥獸皆斃死して白骨固を成り抑鎗
嶽の麓越中界れ山く山中の深山あく人跡絶く獸多く就
中熊乃類多し夏月熊を打ち山林の茂し潜居く谷間の馬
菴寛の三尺餘に生茂るるを餌食小出時馬菴寛の動く代
同當に鎗砲と腰鎗あり燧の火を以て規打にふる百發百中
あやまの半ぬ但し火繩の白ひら壹里隔らても知るゆ燧に
て火を差とせ穴か去獵人の手煉是妙術と謂を

から長物語聞あるし作り眠る間も夏れ表乃つらう明
鳥の舞におどろき言葉残して矢立れ筆と收む夫より一里半乃
山峽とつき本街道西条れ法橋小帰て直に永富長田下井堀おの
村へ越るく程ぬく向の宿青柳おつは

青柳

五丁程相對して巷と成る麻績宿一壹里十丁かり卯の方れ
山小青柳氏の城趾あり城主青柳近江守清長同伊勢守頼長
かり始り信濃衆一味よりしつと伊勢守代に甲州の武田家小属
五十騎の軍役より甲州没落小笠原貞慶帰城乃後もか府小縣
郡の真田等と一味して越後の景勝志と通ふあや小笠原家一應
乃届なく無様の様子かり殊小怨敵より一擧げあせり取合始り
あや麻績今田等一味られ輒く亡がされお依く小笠原方より和
談ありて後松本へ招く二の郭邊に兵士を伏せ置伊勢守を討取
て即時に青柳へ人数と差向らるに依く軍不意小笠原防ぎ



戦ふ事能らば落城して青柳滅亡あり

青柳と出放まて石山の切通二箇所あり天正八庚辰年八月

青柳伊勢守藤原頼長代ふ切開くといふ其後享保元丙申年

に松本彦水野日より普請ありて切下三尺明和六年己丑年文化六年

己年等遊く御普請有る當時六の方長廿二間中九尺右の方

に石像の観音百斛を造立と珍譽坊主發起とかり小の方長

二間壹尺高八尺中九尺なりとて是れ依る旅人并牛馬の往來

所も煩りしき事なく野を越え山を越し麻績宿に到る

六町程相對して巷となり其餘町裏に散在と稲荷山宿へ三

里此間猿ヶ馬場といふ峠あり

宿の入口左側小佛眼山法善寺曹洞派寺領八石の黒門の脇に庚申の祠及

古塚等あり又宿中程北裏れ山手に麻績山光明寺天台宗といふ

寺有る此も麻績式部大夫が城趾なり式部太輔甲州一属して

十騎の軍役せり

宿の出郷宮本村小神明宮立後山白鳳十二年丙二月九日

勸請なり豊受皇大神と神領神更正月朔日二月九日六月

十七日八月十四日神主宮川雅樂亮宮下帶刀 宮川豊後

宮下織部 寺沢近江

此宿と立出く十八町行一の川村足猿ヶ馬場れ登り口あり暫く

登りて左側小弘法袈裟掛垂とて一古松あり麓に清泉涌出蟹

清水といふあり掛茶屋一軒一の川傍に芭蕉翁句碑あり表に芭蕉

塚裏に いづき蟹足といふやう清水う那 七き代

嶺より水茶舗あり又右小夜が池東西二丁計南北四丁半程水湛へく

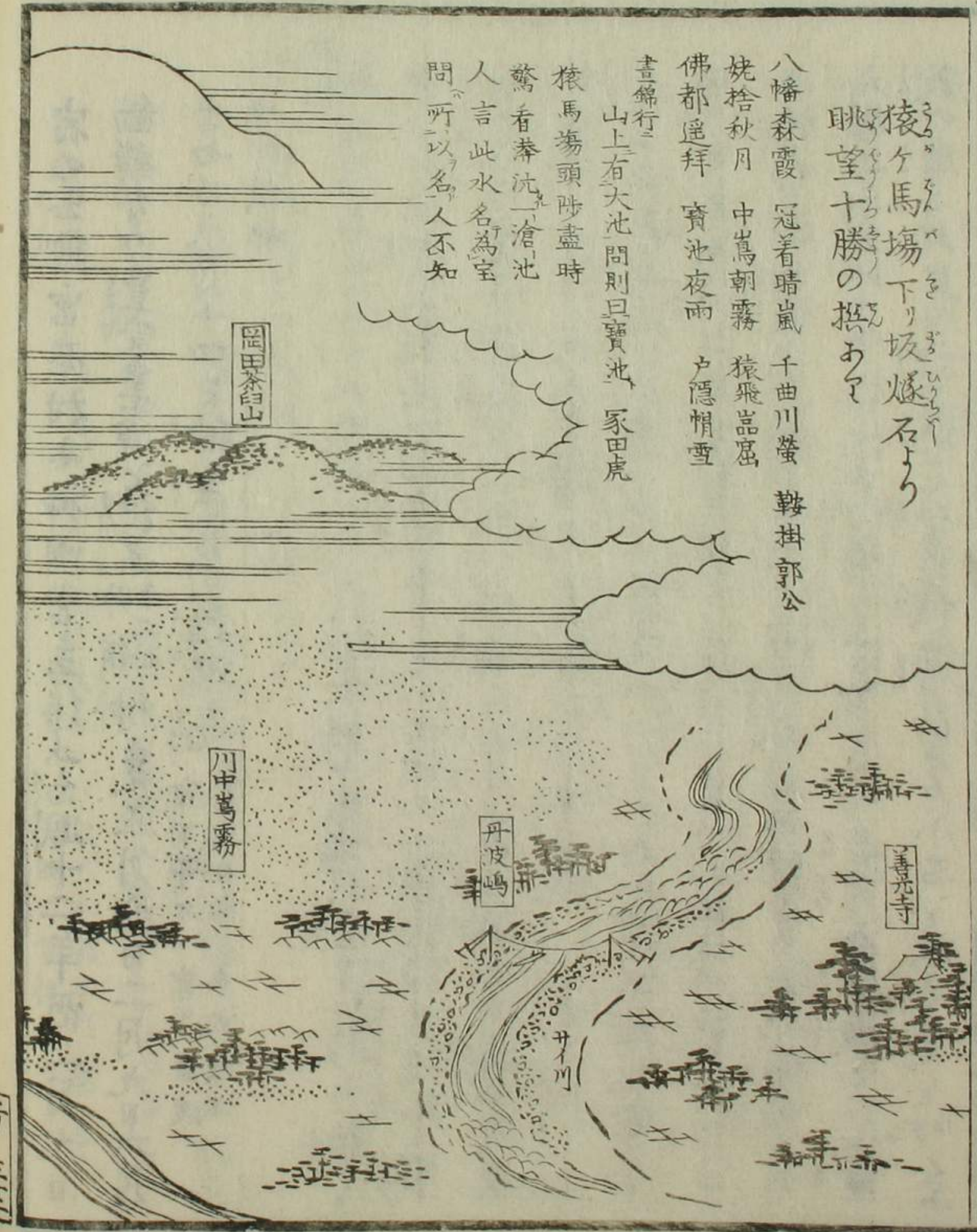
浸りきり此嶺も本も形く益原ゆく平山なり池より五六丁下りて

小池乃上り馬塚といふあり是筑前郡更科郡の境なり右に猿飛やて

大岩二三見ゆ十八丁下りて燧石小茶屋あり名月屋寅藏といふ座

敷の床小大岩と作て込ぐ壁の代ふ用ひたり小石といく是を叩ふ

麻績



猿ヶ馬場下り坂燧石より
 眺望十勝の摺あり
 八幡森霞 冠着晴嵐 千曲川螢 鞍掛郭公
 焼捨秋月 中島朝霧 猿飛岩窟
 佛都遙拜 寶池夜雨 戸隠帽雪
 晝錦行
 山上有大池問則曰寶池 冢田虎
 猿馬場頭陟盡時
 驚看春沈一滄池
 人言此水名為室
 問所以名人不知

火の出るに速かり往昔八幡村八幡宮に神燈及び神供を調ふに此所
れ石を以て火を改むる方なり故に今に至る迄燧石の名残ありと云
暫く下りて更料郡中原村に和田何某（女也古傳門人）元龜年中より乃
旧家ありて庭に一株の古松あり七曲の松と称するより一高九三間
内三尺根より廻り八尺五寸程枝東西九間餘東枝六間余 西枝三間余南北四間五尺程南
二間五尺程此一樹曠庭小所を得て霜雪に犯さざれば四時蒼々と
小枝二間程を合し十蓋に繁茂せり行文旅人立よりて十歳の
て實小晚翠と合し十蓋に繁茂せり行文旅人立よりて十歳の
蔭を作がけり免やと

桑原村と越へて暖の左側小茶店あり軒乃高きに往還の上を通りて葡
萄棚を掛りて夏日炎暑と避る幸れ趣向面白く賢し

△葡萄本綱 甘平漬無毒時珍の説小物類相感志とつし書を引く
曰甘艸と釘とて葡萄に針となつてはばぬぐく三所小死ま
葡萄棚の下に酒を飲たかるとぶどうれ虫の屎落く酒小新

時々人を傷るとつり又葡萄酒本綱 甘辛熱微毒飲に

本綱 ぬぎう酒を腎とつり失彩色と病と寒に耐るりなり

同 葡萄酒の百病にりり常にめらひく中とらり

日 ぶだうと骨筋強く身れまびとまて力まけ物ぞり

日 葡萄酒をい法病にめらひ酒小は虚熱と解し目をよくする

日 ぶだうを子慈ふより一扱又吐瀉れくくらんやち

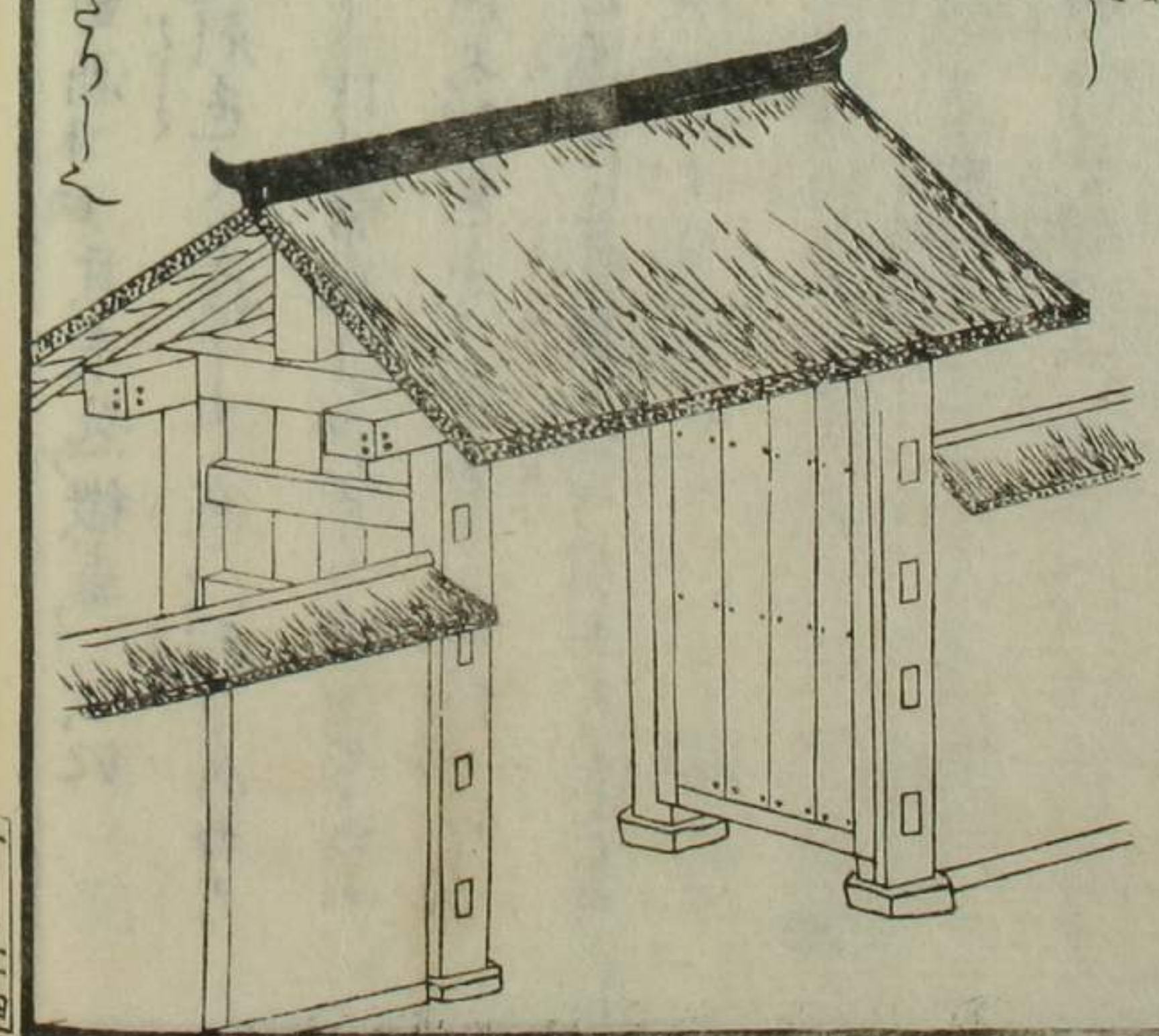
子慈といはるみ女れ七ヶ月八月の比子とて胸へらりのり胸

腹腰をいむ事あるとつし何れ胎中れ子の動く事なり

奈魚邊より善光寺迄地形平坦して坂後の慈ひたり志うま
山園なる故高低定まらぬ嗽ぐたり小川近り水行列りしは巴野に
水車と撰（米など煮れ自由と得たり）和夏始 水碓天智天皇九年に水碓を
造らば由日本紀小云云
左の方田に中石の向碑あり表に芭蕉翁師走塚横に
かんぢは降走の市り行りて次
えせを

更科 稻荷山

八町程相對して巷をなれ丹波嶋宿へ三里三代此宿中央左に
 高市太神といふ立石あり一ヶ月小九ヶ日五市立あり商人多く
 して家數凡五百軒ありて繁昌の地と向屋松本完司といふ者
 宅地五町四方所除地あり是則越後の上杉謙信出城の跡とて門
 其時の裏門乃儘の由萱菅あつく逞
 本丸櫓臺の跡に古松一株あり
 屋敷の四方小堀跡見ゆら門の
 幅九尺をくりゆく四足かり南
 北町と城小路といひ松田郭
 と云畑有北の町と馬出小路といふ
 松田郭といふ天文の頃八
 幡の神主此所小に在住して
 信玄出陣の時川中嶋案内者といふ



稻荷山といふ者も桑原村の内なり上杉出城繩張の時
 繩の内へ白狐飛入りに依り稻荷山と改らるり今松本氏
 屋敷の鎮守也白狐を祀るといふ
 驛中に三辻あり左へ行ハ善光寺道之右へ壹里入るふと姥捨山小列
 其内八丁行て八幡村に八幡宮あり神領御朱印二百石百石ハ神主松田氏
百石ハ神宮寺

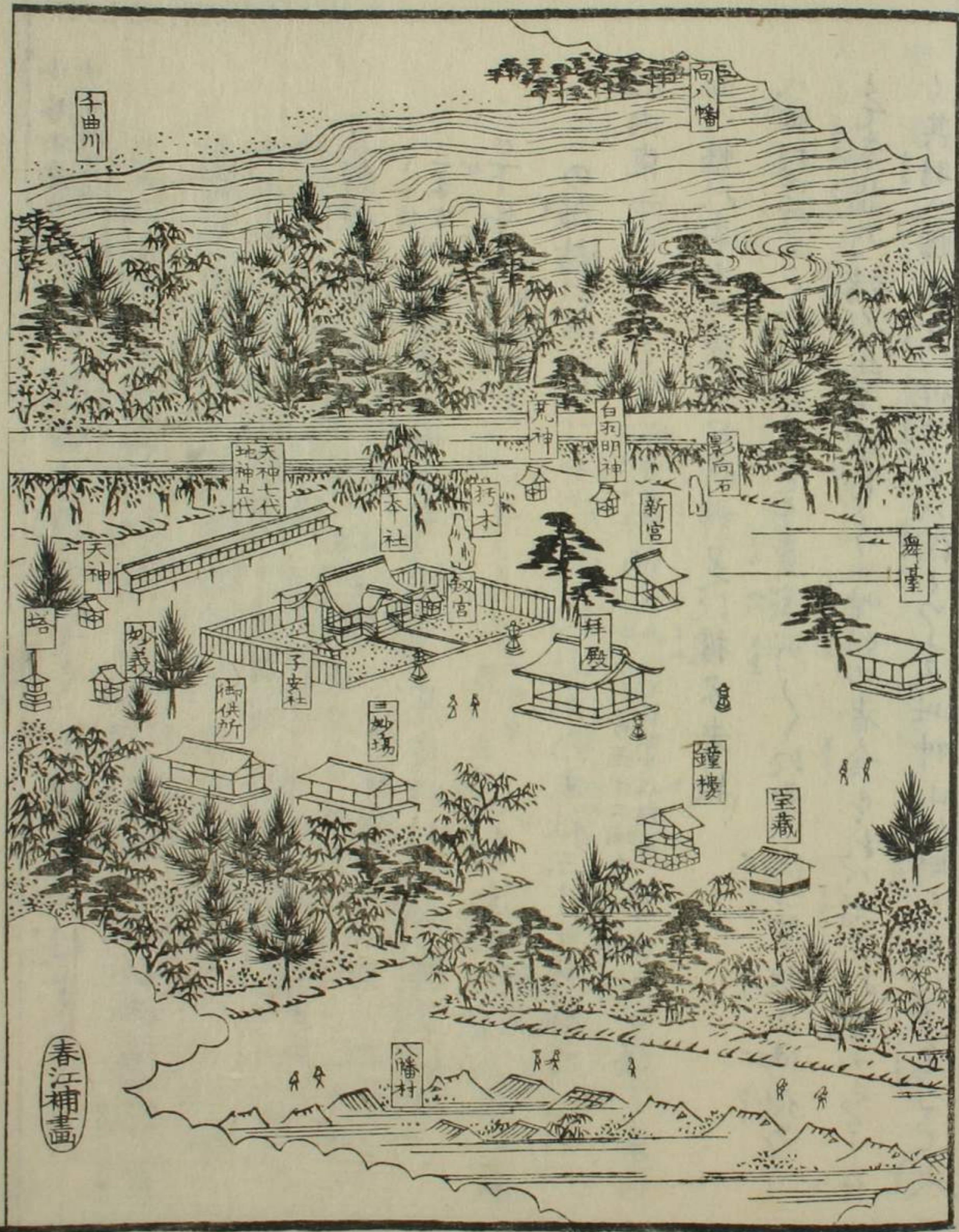
○武水別神社 名神大 八幡宮と称す

本社 祭神 應神天皇 玉依姫尊 姫大神 三柱相殿

貞觀二年二月五日信濃國正六位上願氣神武水別神妻
 科地神無位駒弓神出速神並授從五位下同八年六月朔
 日授信濃國無位武水別從二位同九年三月廿六日丙寅
 詔以信濃國從二位武水別神社列官社

延喜式 東鑑

信濃國更級郡武水別神社 名神大
 文治二年三月 信濃國庄之更此 小谷庄 八幡宮 御領 氏子村教 多の中に



八幡村八幡宮

當社祭式年中七十五度の内

。正月五日祭始夜入内田遊

。二月初午祭

。三月廿八日太々神樂

。五月五日粽献備

。六月十四日十八日迄神供儀

。七月八日より十日と三ヶ日

の同膳祭と称し神供儀

。八月十四日十五日放生會

大祭あり

。同月廿五日相撲

。十月十日より

十五日迄

昼夜大祭

。十一月晦日

神供神酒

献備



小谷の庄ハコの古コの神領も許もと多くく二百騎ニヒャクキ軍役ぐんやくきりり

天神七代地神五代の社一棟少く本社ハコ在あ。荒神あらいがみ。白羽明神しらは。影向石かげむかひいし

新宮あらたのみや社本社並な。天神祠あまのてら。妙義祠たみよのてら。石の塔いしのとう。御供所ごくうじよ。三妙場さんたうじやう

各本社各ハコの東に。劍けんの宮みや。子安こやすの宮みや。瑞籬みづきの内うち。拜殿らいでん。勅使殿ちくしでん。本社の南ハコに

鐘樓かねのうら。寶藏ほうざう。御手洗ごてら。東流あづまして千曲川ちまがは。塔とうの形かたちを

一本いっぴん有あ。妙法堂たうぼうだう。佛供所ぶつぐうじよ。高良明神たからあきらめがみ。神輿かみこ舎や並な。

下馬橋げまがし。石いし少く長なが二間にま。朱ノ鳥居しゆのとりい。高三丈中たかみさんぢゆうちゆう。青海橋あまのうみはし。一丁程いちぢやうぢやう。鷺ノ森さぎのもり

の諏訪すゐれ宮迄八丁ありすゐ。社外すゐ乃末社すゐ三十ヶ所略之すゐ

社内すゐ東西百四十六間内百十六間。南北東少く百五十二間余。千曲川ちまがはと隔へく東あに

向八幡むかひれ森あり水別の神跡みづべつのかみ是こゝに據たもる者もの歟や

八幡村やちばんむらの町まちわく餅もちのいを賣うる家いへ所ところにあり清きよ夢ゆめ想そうの御供ごくうなり

とて参詣まゐ乃諸人もろびと是こゝを求もとむく懐妊くわいじんの者もの食くらむれ出生うしなれ見み小こまる付け

く其時そのとき八幡宮やちばんみやへ清きよ陀だ申まをせば消きとつ又また此神山このかみに時ときを志こころむる鳥とりなど大おほ

宮の園みやのうれ木きいら泊とどらる高良明神たからあきらめがみ乃邊迄このへの木き小泊こどる但たゞ一宮ひとみや乃方このあたへ尾おをむけむとろ人ひと頗おほ禮れいをおるふ似にたり

鐘之銘かねのな
八幡宮やちばんみや 信州更級郡小谷庄しんしゅうまがらひのこ 奉懸洪鐘一口ほうけんこうしゆ

一峰戴雲いつほうたいうん 遮那妙相てなみょうさう 九乳鳴風くじゆめいふう 金口説教きんぐつせつかう
宿留催米しゆくりゆうさいまい 已果願念いこくわんねん 三寶諸天さんぼうしよてん 納受知見なうじゆちけん

應永三丙子五月廿六日おうえいさんぼうしご
惣目代そうめだい 僧光宣そうみくせん
神主かみ 源國氏げんくに 藤原因光ふじはらいみく

大檀那願所少別當用寶たいだんなくわんじよ 比丘宗濟ひしゆくしゆけい

大工藤家光だいこうふじやけい
所司供僧等右筆導榮しよしきうそうとうみぎふでうゑい

鰐う口の寛正年間うぐちのくわんしやうの寄附物よせつけものなり

養和元年六月十三日木曾義仲の越後國城太郎資永と
川中嶋横田河原小於合戦の刺義仲當社の泰詔して武
運長久れ祈願し翌十四日合戦速うに勝利なり是に
是偏小祈誓の感應小依るものなりとて冥器神田等数多
寄捨し之當家開運の始として永世我々氏神あり殊に
當日の日出度日かれ後來祈祭怠慢なれば様小との古文と
是に依り幾百年の今に於る迄六月十四日より十八日迄五ヶ
日此間捧神供天下泰平此懇祈を抽むる奉る泰詔の諸人小其
供物をさるる若干方木曾家より奉納乃品種を世の乱を
一頃紛失して今いたるた刀一腰の殘り
天文のあり川中嶋爭論の地と成り此社僧等乱妨小れよ依
之甲州武田家より示り其文に曰
更級郡八幡東福寺之事松田武治丞に無二儀進之由と

之京後中法事以下之勤行如舊規お勤め可有儀候也亦
宵院主之下知を必法存分て遊放く旨在 傳下知也
の如件

元龜元年庚午十二月日 土屋右衛門尉

其頃八幡の神主松田氏と川中嶋案内等致事し事川中嶋
四戦記甲陽軍鑑等に見えり之其後上杉家支配しり時
乃令小曰

就稻荷地在城中付八幡社領一畝預之由昼夜
を起す不可有伸訴者也仍如件

天正十二年五月十七日

朱印 松田民部助

又其後越後中將家より傳禮傳馬印等傳奉納麻乃傳紋
附古風呂敷あり傳馬印の今年十一月大祭の刺法室と稱

一 傍之唐人笠の形少く徑四尺高四尺細代組少く金箔を
押。亦其後海津彦より寄附の燈文有る

為當社祭領於八幡郷之内百石令寄附能令
て候知者也

慶長七年
十月十二日

忠政

八幡神主

尚社系流儀如忠にて執行以為入用穀子百俵
き之に林七を忠手あふて流元并社家法度以下
望て申付者也

八月十日

忠政

八幡神主

慶長九辰七月廿一日大之保石見守及順檢と寄附社
日神領の法書附立下し不見き後法書存上神領二百石乃

御朱印を賜り殊小神主儀ハ七ヶ年々度年頭御禮
公義一寺日見 寺継同寺礼之節々時服一重拜領也猶又同社
少海津彦より寺代社邊之制禁札を下し
神祇官卜部家付書二通

信濃國河内郡四郡社家如先規神役可考事
第一寺山依く作法付く一辰並年々度留士雖為探定
為社家之儀て終系禁以上社家者ヲ無理山依
於引入志守と令上條照高院殿の寺に寺理申上
上方極一寺爲出さし以後方之人同明仕社家お限事業
内て申付也

慶長九年
九月朔日

民部卿

初助

傳馬

兼治通
朱印

一信州國中至社家祓宜不盡之中分有之者為
惣社家中至申後一味同心肝入專用也若此等於
相尙事者為各可申改者也

一祓宜社家之氏子旦那已下注連被潔齋始伊勢
熊野富士山其外諸社系詣必先規之可仕事

一自往古之社頭始而新義仁山伏見相拘事神國之
作法仁相違以速理申入可究申事

右三ヶ條は法度國中社中々急度可申
渡者也

寛永三年十月廿一日

神道管領長上卜部羽后兼某

信州 松田宮内大輔

右の文字如形写付りぬ

抑當社年中行支の中ふ例年八月放生會十一月新嘗會と
大祭なり西月とも朔日より十五日迄神主齋あり氏子十三ヶ村
れ内ゆく十一月の頭人五人を定むちり毎年十一月十五日の夜ふ
入て神圍を以て翌年の頭當り代撰む當りて筆法供田わして
米を作る凡五斗俵百俵餘耕作以下俵に納る迄婦人れ手とか
き灰不浄の肥しを不用といふ神酒も手作しく醸らる酒なり
祭禮當日大門通りの行列も毎年仕組替るといふも去年天保元
宣十一月の番組を記に但し一番を以てし馬車なり是越後中將家より

- 壹番 馬印 貳番 修驗 三番 太神樂 四番 鉄炮 幟
- 五番 幟 六番 太神樂 七番 鉄炮 八番 太神樂 幟
- 九番 太神樂 七の道具 拾番 のり 十一番 鉄炮 幟 十二番 太神樂 鉄炮 のり
- 十三番 七の道具 十四番 幟 十五番 幟 十六番 太神樂 十七番 太神樂 のり
- 十八番 のり 十九番 七の道具 廿番 太神樂 廿一番 鉄炮



姨捨山の
とら林
嵐を
月影
家隆

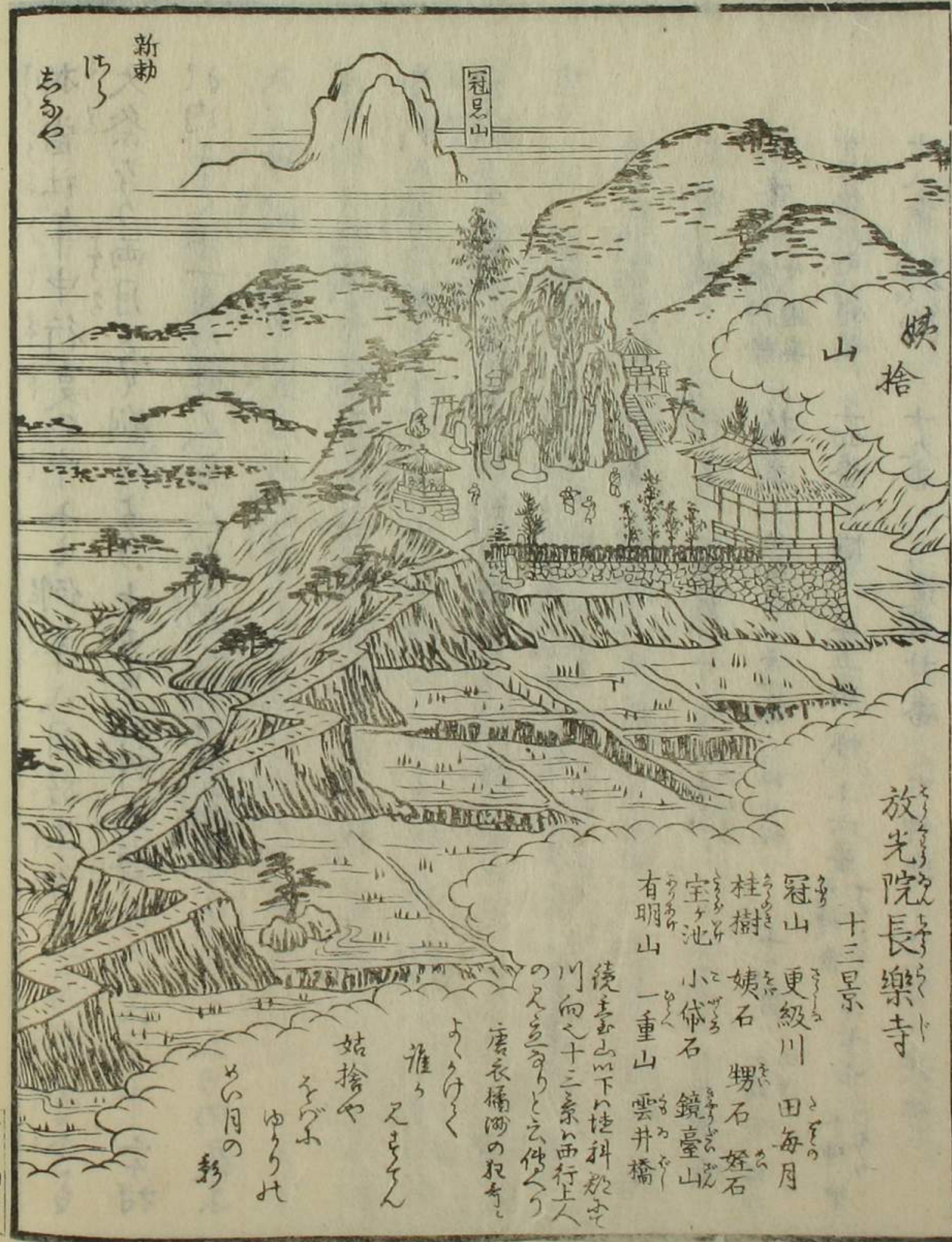
後志山

一重山

千曲川

いさ
おのの
月影
回舟
思村

八丁



新勅
あや
け

冠見山

姨捨山

放光院長樂寺
十三景

冠山 更級川 田毎月
桂樹 姨石 甥石 燈石
室ヶ池 小体石 鏡臺山
有明山 一重山 雲井橋

後志山以下の桂科於て
川向十三系は西行上人
の足跡なりと云傳へり
唐衣桶のねき

あやけ
推
又さそん
姑捨や
そいふ
ゆくりれ
あ月の影

三十四

廿二番 のりア 廿三番 幟 廿四番 のほア 廿五番 引壽臺

廿六番 兼掛鑊炮 太神樂 廿七番 京鹿子娘道成寺法師 廿八番 幟 鑊炮 兼掛

廿九番 鑊炮 幟 三十番 狂言 卅一番 太神樂 鑊炮 幟 兼掛

此外松代藩中より出る鑊炮大筒二三十挺なり

右此番數年々定りて卯年ハ廿五番ハ終りて卯年ハ新
手此趣向を立珍しきと競ふ番割の下に出る物の品并に村所姓名等と
記し一冊とあり五人の頭人より神領此役人へ差出さるなり

○姨捨山の放光院長樂寺ハ八幡乃神宮寺此支院なり 八幡より二十八丁

此寺より鶴崎と經る西の方猿ヶ馬場の山川里和歌小詠を古縁多し

此山を冠岳此下の丘ゆく山乃姿嶮しくは舊し本立を見之侍ら

ハ月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

横十間余 石此傍小觀音堂あり 本尊ハ正觀音 満月殿二間四面庫裏之間

半已午に向へり面ハ棚田の上に望きり 神田四十八敷と云や並て神供を奉

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

は月を稱之れ勝地と謂つる山腹小大なる巖石一ツあり姨石之

縁起

大昔地神三代の尊れ御后と本花開耶姫と申奉る其御父と大山

祇命あり此姨姫と大山姫といふ姿醜くあまをせし荒く他のよれ

事と好し愁を見て悦び四十も過させ給ふ迄誰むろ人もの此故

に甥れ命或ハ姪の開耶姫を申し合セ嫉妬の汚心ありすゆゆ人

諸人忌み誰迎ふ人もあり自今汚心直にならせ給ふと云ふ



木花開耶姫
大山姫を伴ひ
更級山よ
到り給ふ

いと紗つらんころに諫つとめ入りた姨おほ姫ひめ宣のたまふやういふてうまぬをふか
らうやや有ありけれ共とも時ときさくや姫ひめ是こゝより北きたの園の小こ更さら級きゅうと
つつ所ところあり爰こゝの月つきを詠な給たまへ御ご心こころまぬるに成な給たまへんと教しへ
終つひ姨おほ姫ひめのそよとて開ひら邪よ姫ひめまろともいひさみ姫ひめの数かずのの客きやくを
打うち越こ津つかの高たか根ねに到いたりて爰こゝの姫ひめまろふれ石いしの上の上に登のぼり指さ
ぶぶ此こゝの乃なるちよとに盤ばん石いしあり是こゝに登のぼり浄じやう心こころ穩ゆたか小こ四し方ほうを詠なめれば
浄じやう心こころ清きよらふ成なるわたくし給たまへぬ姨おほ姫ひめ旅りょのほろとあや浄じやう身みを
弱よわく弱よわく秋あきの月つきを詠なめよよに栗くり和わの浄じやう心こころわづろろ生なじじ忽たち大だい悟ご
ははくくく姪めい姫ひめ小こ向むかひ吾われも永ながく此こゝ嶺ね小こ住すまむ諷ふう訪ほうれ健けん浄じやう名な方ほう
命いのちと俱とも小こ此こゝ園のを守まもらんとて今いまこや天あまに登のぼると宣のたまひて月つきの初はつ
小こ入い給たまへ姪めい姫ひめ婚こんへへ姨おほ姫ひめこの山やまに捨すられさ給たまへぬと跡あと
とふとおび給たまへ終つひ夫おとよりこ此こゝ山のを姨おほ捨すれぬとひひすすへへ下下略略
夫婦ふうふ娥がと月つき宮みや小こ走はり周あ生まの道みち術じゆつを中ちゆう秋しゆうの夜よ客きやくと會あひ

大和物語

月色つきいろも瑩わらわかりたる客きやく小こ謂いらく我われより雲くもの様ようと為なし月つきを取とり
懐なつ小こせんと忽たち數かず百ひゃく條じょうの繩なづなを出いし是こゝ小こ駕かて宅たくをと陸りく地ちを行なぐ如ごとく
係かひにて元もとの繩なづな小こよりて下くだり手てと舉あげまへ懐なつ中ちゆうより明あ白はくれ玉たま一ひとつ
寸すんたろりたるを出いし光ひかり色いろ照て爛らんくああとと照て一ひとつ寒さむ濡ぬ人ひと乃すなは肌み
膚かわに入いりて冷ひやなりとぞ是こゝ等られ術じゆつやありきんんうう
志こゝろれぬの國くにはくくなるといふ所ところ小こ男おとこ住すまむ若わか死し時とき小こ親おほやも死しけ
ここば姨おほ姫ひめの親おほやの如ごとくに若わかくよりおおそひくくつつはは妻つまの心こころのや
をうを死しりまくて此こゝ姑めいの老おいふほり居ゐるを帝みかどにいちちみみつつ
男おとこも此こゝ姨おほ姫ひめの心こころのささかさちちののききままとといいききををさされればば昔むかしれ
如ごとくくああららばばああららううああららうう多おほくく此こゝををのの為ためににああららううはは
下くだ畧りやく或ある日ひ大だい和わおお詔みことちち古ふる今いま集あつの奇きににいいははれれくく作つくまる物もの終つひとと願ねがふふももここさ
姨おほ姫ひめを持もつつ其その夜よその山やまを姨おほ持もつつややももおお持もつつややとと契せき仲なかつもも死しせり
やや一ひとつ母ははのやうようにに居ゐるるひひととててああららうう姨おほ姫ひめをを妻つまののいいふふつつてて甥せうの
男おとこれ月つきのううままるる夜よ卒つひて登のぼり捨すりたるるようよう姨おほ持もつつししののいいふふ

袖中抄

母一人のめいと子にて手頃なすかひたるが母れ姨子老く
むろりつりなれを八月十五夜の月乃隈ふるさけにけ母と
まう登きて踏くゆりなりまう一人山乃頂小居て敷もま
くら月とてく誦なる奇なり其後此山を姨捨山といふ

古今

拾遺

後拾

建保百首

新後撰

續千

新勅

續古

後拾

季ころあさきさきりつ川文級や姨捨山照月とて 読人不知

月影をあふひるるもほしりなれ山の麓ふかろるれ君 紀要之

あきやらの月さる度思ひなる姨捨山乃よりまらる 橋為仲

とほろる月の都ふらなりありて秋の夜にうけ文級に里 定家

子親方さきもやなくさすぬ姨捨山の月にあくる夜と 宜秋門院 丹波

月又さの衣手寒く更級や姨捨山乃岑れあは風 漁倉右大臣

今更小文級川の流きてもうれ新又せん拍かきうに 縁人不知

しじなや夜もほ月れ里人もあきさきうて衣うて 順徳院

文料の山乃嵐も輝きみて本筆れ麻衣月いら川と 同

家集

新世奇合

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

月とついで伯母捨山の秋乃る海宿と文料の里 寂蓮

秋あつたなくさきうの月影とあれてもあき姨捨山の 参議為氏

安きとやともいふ文料やけりあや秋の月いさやけ 為教親長

名ふ高れほやそあきけ文級や月さむ秋れ姨捨乃山 為継親長

更級れ山乃ききやくみる川さすけはすあき秋の月影 經平朝臣

判の廻につく文料の岑よりあつ河けさうれ乃とめさそ 全

わの宿いとえ捨山にさきみて秋のあきを月やけしむ 阿闍梨 宗尋

更級の里をいれぬ月影にさきまはるる衣け 信實

けりかや姨捨山乃紫れ戸にさきりも秋の月よりけ 御製

あられたうまきさきうの文料やからぬ山も月やまらん 大僧蓮慈

月出えよさ文料の叔半れき姨捨さる秋乃山うた 大納言通光

更級や岑吹らる秋風小巻けりあきて出敷月うけ 俊成は女

里れ名の秋いさきさき月影に人やつた文料の山

道助法親王家

辛酉和奇

四天王院障子款

建永二年

同	志那のちや雲井ふ咲一文科の里はあふをた捨の山	有家朝卜
同	嵐ゆくの月影秋形うらもほりかれ里のーら雲	定家朝卜
同	秋風のうく大雲れ月の色もさ里の乃乃文級の屋戸	家隆
同	雲ちうれ山影の月と人と今文科れをを捨乃々	雅経
同	詠りまひ誰と心れれりひう形かくてゆりたる文科の月	具親
同	更科の月く嵐ゆ色あさひまささるぬ山れ雲を晴る	秀能
李花集	ちう一形の月足てふも森へう都れ秋乃そそ意しれ	信実
同	あくさまぬむなさとや更科の月る里も位うかへん	全
同	名ふしうは捨山にてる月もさあ乃月とそとあは	全
同	徳ももに捨捨山とあぬとあにうこれ文科の月	全
為忠家	月れきむ捨捨山の志さあやむしれ人乃ほるるら	頼政
今撰和言集	捨捨の山乃りれの志るきれと今文科に照さ月影	清輔
後古	月やあぬ詠いつつも信法海や今文級乃有明の月	後鳥羽院

後撰	吟りこん空も志う捨さ捨捨の山より即一月をそりあふ	重光
後拾遺	まことあや捨捨山の月りあつよを文級と思ふあつと	赤染右衛門
詞花	<small>風流をい捨山の月と詠りる旅人のうた</small> あひてりうくてや我身ちみなま捨捨山の月足さうせら	律師舟菱
千載	つ月ことし月いつうといふさささけかろん文級の山	隆源法師
新古今	文級や捨捨山乃有明れはさほと物を思ふさあふ	伊勢
同	文科の山よりなく照る月もかくさめうひつげのや	躬恒
類題	照月とく一夜をてて文級や岑照るちと秋雲れや	後鳥羽院
六帖	捨捨の月ともめてみこと川流て君さ守るる今我	詠人志良
	その名とあひ出せの今も捨さくは免うゆる捨捨の山	菅原利卓
	あひふあむぬをえ捨山ふさう乃月	宗祇
	おとかけや捨ひさうりなく月忠友	とさげ
	ちうしあや田毎れ星雲化さうろ	木因
	更科や馬乃思は秋の月	言水

月夜より田毎乃粒を小盃

如泉

雪ふし来るるれう田毎れ月乃照

露川

穂入る田これ昼乃むうり火

木見

姨捨や月をきくけかみきふ

白雄

野のすくた詠ふやてれ坊まき菊

夢語

おん捨くくさつれて来く後の月

也布

姊石れ肌まきさゆやうの月

方山

姨捨山の月にさめたる特の文

松代藩 宮園宗吾 式正

三鴛州科野の國をむく山時ち山くい多にあきども更科乃

里姨捨山を大八洲の國内月に名の百玉みりて我き先系郷

少近く色に視らる友ども打はむい小柴はく阿須波の神

の手向して道をぐる及れ盡く尚故見杖いゆれ進ひ天の魚

つらう月いきせいらく系行觸を愛しみ素啼く八

月れ初雁乃群きた遠く千町田志穂の上代ワく秋風や

蘆乃中道より多川く出く珠水激瀧ら流く百隈や千曲川

の流小到ふ此川を萬葉集に信濃なる知具麻の河伯の

けりも君いゆきて玉とちろり舞且とらけらも縁の

歌多し細石を月れ眺ふ玉を委まや思ふを寥亮し川

上もかぬよみの峽乃國に隣きるみ山より巖おぬり隈まに

に廻りま流ら支那邦多高志れ國小到てつて流みれ瀛中

小流を入る細流しれ小舟にいられさつりて物部の八幡

てし里に武水別の神社あり此大御神を穴戸志豊浦の宮

に治天下天皇れ皇太后ありさるる三韓乃ちたるが神を

を退治しりたくづぬ乃新羅の國より還幸し一年志

十二月あつる日筑紫れ國訶志比の宮に治天下終る

此命崩御し後川内惠賀れ裳伏乃國に葬り奉りて十



乃梨よりぎれ御代るく師本鳥金刺乃宮の大御時
豊國乃宇佐小鎮座し彼みよるを升まらむはきごの後
清和天皇の大御代の初山背忠國男山にうつり奉り同に
貞觀の頃此處小宮柱太知立高天原小垂木高知くみ川
のみらるるの國津御神と齋に奉り車日本紀及び三代
實祿等れ御史に録されりおとろふ小暫く額さまより
姨持山に攀り日刺方れ阿き月小向ひんをまわり持とえり
やま九過去し晴首を思ひたふぬにかる岩々根の凝しき
路をゆく烈衣と照系月れ明きをくし視し物を今知る事
形一何小因く古今歌集にくかむ懸兼つと一歌を裁
らきかれ部に仍くなり大和物語小姨を捨るる
代物一つは中楫の音れ委曲ゆき穿えん作の奇い親身の
代々の勅選集あは家くに書きたるをれ拙おもてつるかや

歌しめひ辞あぬむる月見るさきみあたる極遠近中
かぬくくつて秋芽子れ花野末乃あ野等れ草刈男に
くはのあり因縁を尋ゆる小渡了ゆくあやしき橋を
はし雲井が橋まゝ姪石甥石小体るかられ本賣が池を
ゆあさるまがれ根乃福もくつに物語らひさる名ゆれ
十三景れ其の二川二川なりやゆ故考るに嶺乃雲はうける
代より斜にさち傳ひ来し書ふは是等れ事形一唯小照
月乃名かかあるにより母人の云寄せりる人し其のあさる岩れ
岐小音れく微幽き谷川乃流あるを更級川なりと伝はれ
のま借思にたをうれ流うら舞國あり文科川を真に千
曲川れるる月影小見放せはるるに藤枕高井水内の影と
別ち川流をくらくるらつらみ形更級れ里はきかれば千
曲川さるむ事物然しそがら流小そく青整樹の山

忠孝れ小山田ゆりのまるうげを田毎の月とて此ら風雅
士乃りてたやの名所や成まり田ぶや乃影らつと近き世
小休諧て俗調奇くく色意と生る公羽れひはるりのに
見くくが濫觴少くあらふを足らぬ南に振枝見えば不
時小雲居たる花き神はまる冠着が岳ら青雲の空を
と凌て龍從きり八雲抄にかまて山といふよう後楨
抄小有や紀一はるかかて此地を彷徨らひ彼地小猶豫不
ぞの日々のいほご高くつらうと鬱悒くも西よ没を山の
端乃左佐良枝壮士のむきと東にめんてるの色づり秋乃露
霜ねささへく夏夏そつる山あると鏡臺山と唱るや我思
いあの山より出る月れ時々くこの川にけり舞を今夜ら
げ小望れ来乃仰だ望く打むふ向れ岑より立昇れ
真澄の鏡掛けるがぶく又もきなるる一或集に名し

夏ふとあし小をぬくる中のもも寒亮山よりいつは月影や
よみしは是との山をけりて神の和泉式部が歌たり鏡臺の
事い古れおふら見えは其ヶ岳上はきり閑朗く明紗空の
影残る有明山と負つる石岑あま此名とききく御園の玉
内こらしく小に架彼嶺より北へ斜つ尾乃長く引ぬ代
蜻蛉羽の装もろけさ夏衣一重山といふと一重山を
詠らる萬葉集めも偶あまどもまきり魚とて一隔の山
忠孝のこまく且款乃體を志のまはけは此二山小篠葉
にうけや霰れるくく小慥阿堵とて文定史どぬきけりや
月小便ある所めくく小慥阿堵とて文定史どぬきけりや
實累に依く詠むく斯く底高き一跡と論らよる
流たやくより其所にむる名々秋山の樹れ下陽り逝水の
音とにきく隠はふあわけて生る草芽れよくたね名代



將軍塚之碑
事跡ハ本
 文ニ記ス

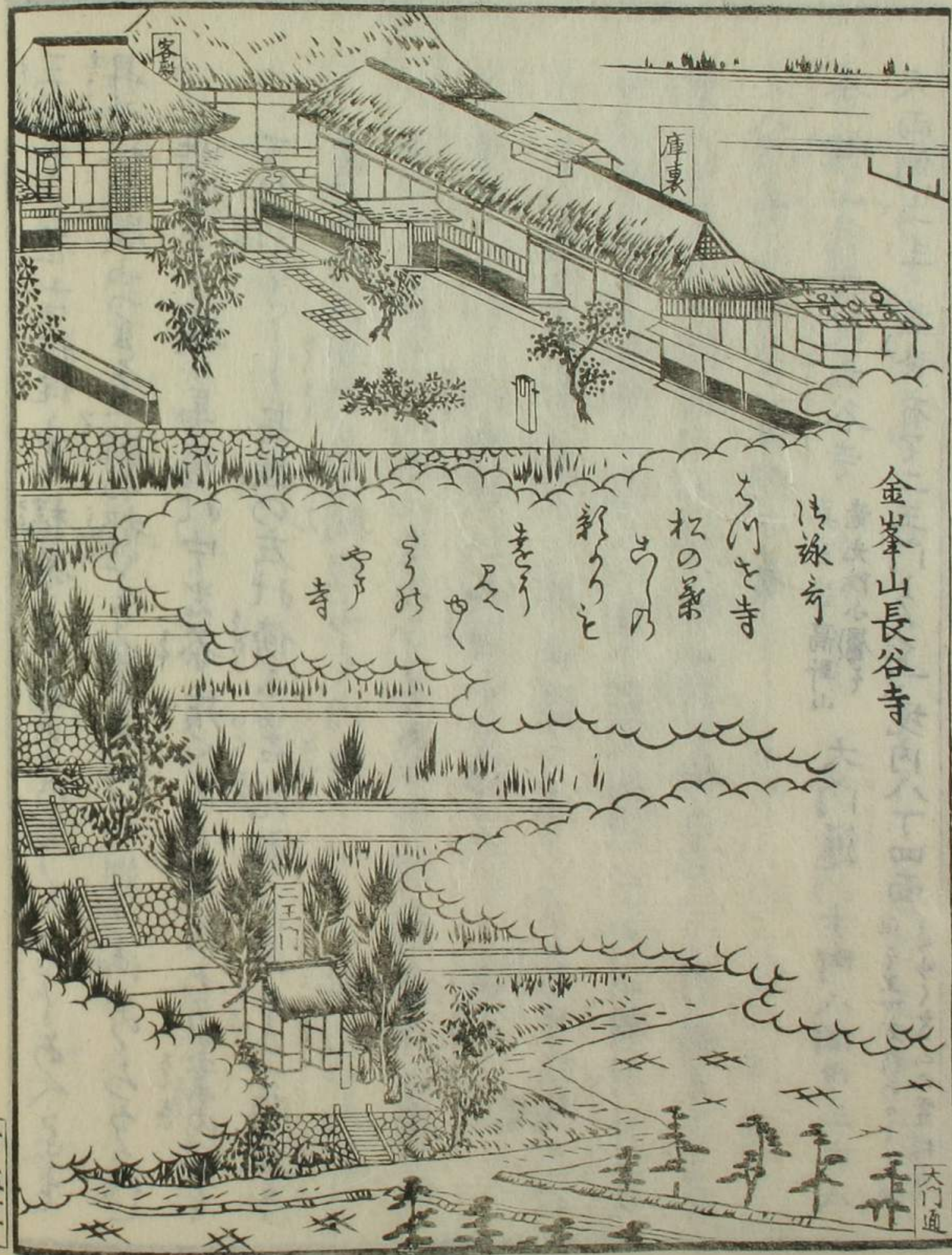
舒明天皇時代
 白助之翁
 長谷寺觀音開基

若生茂マク矢も貫らぬなり小マの
 此池ニ蟻地住て折ク一里ハ
 見て恐怖とらとら

其圃マの海小島八九尺斗の
 十二丁程の池あり

又此山のいづれに巨

白助之翁の碑ハ
 觀音堂より西八丁
 境内井平山ニ在
 三百年程以前に
 建とて其文字ハ
 不形なるに其倭縮寫
 なるなり



金峯山長谷寺

法縁寺

松の葉

あめり

新のうと

きう

や

や

寺

大門通

本尊 十一面觀音 春日作。客殿本尊大日如來

八聖權現の社 菅山の地主神といふ。愛染社。荒神祠。開堂。以上本堂の左小在。子安地藏堂 行基作以上本堂の右にあり。山口明神祠。

○觀音腰掛松 本堂の前。右小あり。 山門 同上。 方丈門 同東。客殿内小あり。

○天神祠 石ダシ。左小在。 大夫坊覺明力石 石の左小あり。同下石階。 其外石階の左右に諸佛

乃石像を安置せり。白助之翁の塚の境内井此平山小あり

寺傳云 當寺開基人皇三十五代舒明天皇此御宇に當り 允恭天皇六

代孫白助公羽の開基より其後養和元年本曾義仲當寺に立寄

可致随意の由申知小僧侶敢く不随故火を放て一字も残らん

燒拂ひ寺領五萬石也此時召上退轉小乃小 此五万石も白助翁五人の子息小一歩

石は配分して五ヶ所在在城あり 小今一ノ官より五ノ夫より百餘年我

宮すて六ヶ村小あり 長谷 塩寄 石川 稻荷山 東原 巳上

狼の栖とい成りゆ粵に恭も 久明親王御靈夢小依て境内除地

十五石八町四方大門長十丁八間余中三丈八尺余御寄附執權北

条貞時より中興真海上人へ御印書を賜小後位尊善法印

建徳年中故有て出寺其後古義妻帶持十一世過て密寺小成

天正年中尊海上人住職其跡宥海法印度慶長十二年に秀海住職

より連綿して十代當住小至り 御印書如左

一 御除地 拾五石

一 境内八丁四方 山林九

一 大門左右様三丈八尺余長廿拾丁八間余

觀世音菩薩依靈夢書面之通

久明親王可為御寄附者也

正應三年 正月七日 貞時判

信濃國更級郡長谷郷

皇山峯山長谷寺住

真海上人

右御印紙の趣小仍く千今正月七日夜於觀音前五穀成就の御

祈禱執行連綿なり其時の唱文あり

まうんごうしよせりそんみつれり洪水くさうさひろくやが佛さのまう
まうごうしよせりそんみつれり洪水くさうさひろくやが佛さのまう
やうしよせりそんみつれり洪水くさうさひろくやが佛さのまう

右の返。洪水供養の時巻や、水をちりまけり、乃時米をちり以て

○白助之翁の塚は境内井の平山に有る其邊を將軍塚との令
寛政年間小島と閑んとて心ざれ山賊の本は株を堀りて
怪し玉石を多く堀せり其形品一鏡形十面容不色品
れ小石都合六百八十粒一櫛形二品一小割砂石一目穴有之石五以上
右の品は唐神代の曲玉たりむはついで其用所と知る者
は獨松代の意なる神職乃交ありとて宇都呂養主一見を
侍りし書付と抄畧して爰に載す

一鏡形十面 容不同 人皇三十五代より四十代 天武天皇代清宇
近の事只ふより漢土より 本朝の聖代を宗敬奉す

その代々献納物種となりし事日本書紀其外傳記録未
に相見し本朝の年号も亦く尚又金銀不自由なり七
寶れ名石を以て 玉體の御饒等以相用ゆ中なれば此鏡形
も唐土より贛奉し唐鏡とす物ありは亦は是る元來
廿八面ゆく大嘗會御神祭に後高御座六面に御輿小被為
召棄の節五方に四面づ、御正面に三日月星に三光に
象を釣下す由依く二十八面たりと及兼し

一色品乃小石六百八十粒外小管形の細石 是も真紅を以て
綴合せ其用場により大小れ差別ありて王簾の饒なり
一櫛形小似壽に振分系穴有る石標の物二品 右同断
高御座の釣下す四面小相用い垂糸引合は具皆系を以て綴合
は右の品は清浄の具ゆく古代雲上は清用具成なり
一小割砂石珊瑚琥珀等れ名石類を數百年來土中に埋きし由人

自然と細く割き出し

一 目穴有之石五ツ 是ら諏訪の神に靈石に兒玉石と申物あり
其類小相違多之 東条村鎮守池田宮小相納り有之
寶石當時六百餘其外も數多有之

右五種之物堀出たり 場所上石川村諏訪宮の上山の絶
頂あり將軍墳と申傳は處之 山なり 何れ往古大内より被入
少くもゆきま相傳ふ 人皇二十代允恭帝六乃皇子白助之

親王御塚あり 大九二千年に及び

○長谷神社 式の神名帳 長谷寺に隣り深林神寂きり神主滝澤志摩

守源義伯當職 今按貞觀二年二月授馬背神從五位下同七年三月授馬

背神從四位下同九年三月授從四位上馬背神從三位以

上神名疑々長谷を傳寫謀るる或野長背の神傳り式社の長谷万

兼小長谷部笠磨和名小谷の御名共に其地あり和名抄の例一字を省

○白鳥山康樂寺 長谷村より程なく塔寺村往來の道に在り 報恩院と号し 西派院家

本堂十三間四面 本尊阿彌陀如來坊舎三區 開基西佛法師 法然上人の真

弟なり一ヶ歸依小より親寫 西佛法師の俗姓を清和天皇第四皇子滋

聖人附屬の御子なり 野親王より九代以後胤海野小太郎源幸親 信はち

と号し 禁廷小仕へて勸學院の文章乃博士進士藏人通廣と號し

出家し西乘坊信救と号し南都興福寺に學侶より後小叡

小登り慈徳和尚の門下に連り淨寛と改む 木曾義仲の御内

能事の聞え高く越中砥笠山あり義仲が教書を書れ 此時高祖聖人の

八幡宮に納免たり 範宴少納言れ公と號していつと御初雅なりといふ

聰明博識あり一聞千悟の器芝蘭れ白ひ一山に薑を依る

和尚の寵愛衆小超え凡人なかりけるを敬びり淨寛も此

君れ決して佛菩薩の化現ありはるせり常々敬ひ尊

々に此に此に雲霧林を兩度まで感づるより淨寛も

重き事日未に増まり于時聖人二十九歳なり法然上

本堂
鐘堂
庫裡

みちを
ゆつり
て
文屋好孝



白鳥山
康樂寺
門前の圖

ゆつり
カ名
法代の
むくりや
玉おころ
おろち
人毛



人の禪室小至て念佛の真門まゝ入るひし時淨寛も湧小使ひ
とて空師乃會下小速て御弟子と成て法名を西佛と
賜てたる然とて西仏の本より高祖小歸依し信仰深因忠
故小依く吉水の門下は伴とせりよるは法然上人是とあせ給
ひ西仏をして聖人上足の弟子とれり多ひたり西佛坊の聖人より
高祖聖人越後へ左遷の時も供奉しなり北陸関東隨身給
仕せり聖人歸洛あつたゆり初文曆の仰らるそ曰休年年齡
まゝの真しとつとて北陸関東經廻の間隨身して我化益
と助てらるる寔小満足せり自今の汝本國に皈て專修念仏を
弘通あつば是正小我小常陸有んより百倍れ本望なるとべ
と聞えさせり西佛の聖人よ別をなるとれ身代割がごとく
悲くも思ひ侍とて師命れ重と肖き難く謹ぐ領掌し奉
て本國信州へ赴きける始め海野の庄白鳥に一字といひては小

真宗を弘め後又塩崎に一寺と建立し是を康樂寺と稱し西佛
八十五歳仁治二辛丑年正月廿八日入寂と云云

靈寶

- 九字名號 ○十字六字名号 服書小 善信と有 ○石摺名号 安貞二年
- 三部經 以上高祖聖人 淨真筆 ○大般若の截 大夫坊覺明 ○愚禿の御影 聖人二十七支侍自画有髮少て 係形あり侍袈裟侍首卷有 ○法然上人の像 ○御傳繪四卷 覺如 淨筆繪ハ當寺二代目
- 三幹連座御影 聖人西仏淨真筆 當寺三世宗舜筆 ○六字名号正信偈文等 蓮如上人 淨筆
- 聖人御眞骨 ○大經御延書 聖人 淨筆 ○半將袈束御珠数并香合
- 尺八の扇子 已上四種を人より西 仏ハ淨護の品 ○身代の名号 聖人侍 淨筆 餘ハ略之
- 抑圓光大師御遷代も人皇八十四代順徳院の御宇建曆二年壬申
正月廿五日星霜八十歳なり侍往生し侍遺骸も東山太谷に納まる
十五年の間なり然小南都北嶺の衆徒蜂起して曰今天台止觀を
法水流き遠くして四海念仏門小皈する豈偏に法然上人の故るれば

死骸を掘出して白川加茂川に沈めりとも恨と殺せん其以上
野の園より登山し浪江の律師定相といふ者律師制作の選釈集に破
文を書き彈撰釋と題し大師の弟子多き中に有る隆寛の許へ
禪の律師涙をながし自力根情悲しさい録鬼ら水を火とる如く
権化の再来とて大師律師制作の浄書に破文を書き半りといひ
猿きまかりとて自ら選釈といふ書と作て彼定相を殺破を覆
しつり其肝文に汝が僻破の不中といふ諭如暗天飛礫と誅まり
此文の汝が僻る意わく書し破文の自力根情かれ半夜小打つ
礫に等しく文小義めと曾て不中といふ依定相誅憤又保
く鐘を鳴し螺と吹き三千坊の衆徒を引率して大舌の浄庵へ
一同小押寄せり頃嘉禄二年六月廿三日折し法番弟子も
終みして兎角防がんめり一處に宇都宮彌三郎頼綱入道実
信坊二百余騎と卒し急ぎ浄庵へ駆付大庵をさむむとまきり
刃入と既小浄庵走く見々々々實信坊下知して曰津土門の法敵
退治の軍善悪不二邪正一如のさとり往生の門出るれば命を惜ま
事なれと勇進め三千坊あふるも敗れり終り暮る
及べ浄弟子中浄庵の前と守護し後日をさとり浄墓と開け

御控と掘出し鐵の筒に候とち子夜半にまきり嵯峨れ二號段へ
移しなる然さど山門の庇徒せやうねる袖は素の廣隆寺来
途坊園信坊へ居奉る翌正月二十四日浄弟子中評議して曰
月と重の年と越えく山門の傍り止され浄火葬なりと
正月廿五日粟生の光明寺にといひ茶毘なる法蓮坊信空勢觀
房徳智の願依り棺蓋を関き掛し奉さば不思議なる事十六
年土中に在り骸少し損失なく異番量し光明赫奕と
して拜られ浄弟子中浄往生の砌の如く大聲とあげ骸に
さつひ浄本地をうかぐを大勢至井の浄化身とらひたたら
かるとして貴き尊骸を山門の爲し一時乃煙やちなりん半
骸に本意たりとて浄弟子達骸に向ひ少も違つぬやうに一夜
此内小寫し刻し浄弟子達骸の尊像なり色形の浄弟子といふ
浄一生色衣と召給り浄往生に砌浄弟子中浄敬乃あかりに
色衣をせさせたる持の浄姿と寫し半らな小かく稱しなる又
康樂寺に靈宝となし浄弟子中浄本像と成しなり誓く都
小浄安置すといふと騷動せざるす法然上人の本像なり其
奪取す寸半く小割り白川鴨川へ沈めり其此恨を殺せん

まき子く強勃れ取少はるれ都近色やら安屋ヤダに幸康手ちの
開基西仏清坊の法教上人の弟弟子に受られた此寺に送らるると御
弟子中評議のう人昼へ人目を思ひ教をく奉供く康樂寺にぞ移
りたる色形の清木像とて日本小一神なり猶當寺に止りたるよ
由來の妻一は事い心徳妙儀抄并繪詞傳等に顯然なりと云云

塩寄とまき平之保村 左例小枝の大樹あり 佐玄の駒つかささ 越て篠の井退分に至り

立石の柳屋小憩ふ 此山より三十三丁 是より丹波島宿へ二里六丁本街道へ

此茶店あく人の罵ふを聞けバ川支なり小市へまじりくつり

丹波島は渡に中水あくも止るなり其時十八丁川上小舟の渡あり小市の渡
しとつり大水にせも止る者丹波島より三里川上の之米治れ移るまじりなり又丹波島
より三十三丁下はく千曲川を合て一川となりて大豆島の渡りとなりあり篠の井は
北國の瀧原方へ出水の節に大豆島と傍りて柗代を徑り天代宿出よりなり

小市へ出るぬらニッ柿。布施五明。岡田河原 左に馬き山あり岡田の茶臼
山とい信玄陣の法あり 段の石

小松原等と経く小市の渡りに出るまより。小市。久保寺。小此本見

浣花川 戸陰山より と傍りて善光寺れ後丁町へ出るくはき此序

以川上から久米路の橋八右郎が滝をせ見えむとて篠の井へ。石川

け村の長谷寺境内 井の平山乃裏あり ○赤田。原市場 目洗水とて石の三水八幡清水流流情
水とて三ヶの名水あり傍り村の号とせり又控現清水の傍小風穴あり

○秀乃秘山長勝寺 真言宗 寺於十三石 本尊藥師如來此樓門小二王あり空

海の作小く其古躰るる力身凡なう諸願感應著明いとて參詣

の老若なき即二王れ絵像を施り又山間の反圃に娘教田とて四反

斗る一枚の田れ中央小辨天の祠建て其由来の物語あり

むし邪見する姑あり娘ふりく女ま人少く一日の内に田を思

植小まへ一と植終るべ命とまへ一と娘忍く早見より田小

行く田う植よるに中夜二田斗り小成く日既小西山にやんとん

娘歎して曰く此田植終るがれ我命危し死く天道傳傳

みを盡人一心に祈誓し侍りるま日輪文に執き終るは

植終て日没せり其時娘ら精魂盡く其場わく絶入ぬ其後田

崇りありて耕そ人もなかりが五十年もく或人領主へ達て

其靈と弁才天と崇りよりたりたうとて今其田と八人中く

化るとる其祠も田の中央ふるを疊う板宮を建つ立木一本あり



名をきくはれ
 久米路乃ちや
 山人れ
 ふとせと
 けり
 利忠

館の岩

不動の橋

水鏡田口道

水鏡田口道



久米路の橋 又水内橋 橋本橋のり

橋長廿二間 巾二間二尺
横橋五丈四尺 巾同断

館の山 曼陀羅岩と云高廿
七十回余

龍宮岩

穴経八尺

深き一丈

ちんちん

水内杉町

水内

水内

○久米路の橋 水内郡水内村 龍宮岩 橋の南詰 不動 右手に有 滝 日左の詰

此奇歌枕名壽以久米路橋信濃能因可枕小有之云又大和の葛城
小同名れ説あり大和の中絶る事にも信濃の中絶るに由り
ア大和来目れ岩橋も一言主の神造る所説畧之

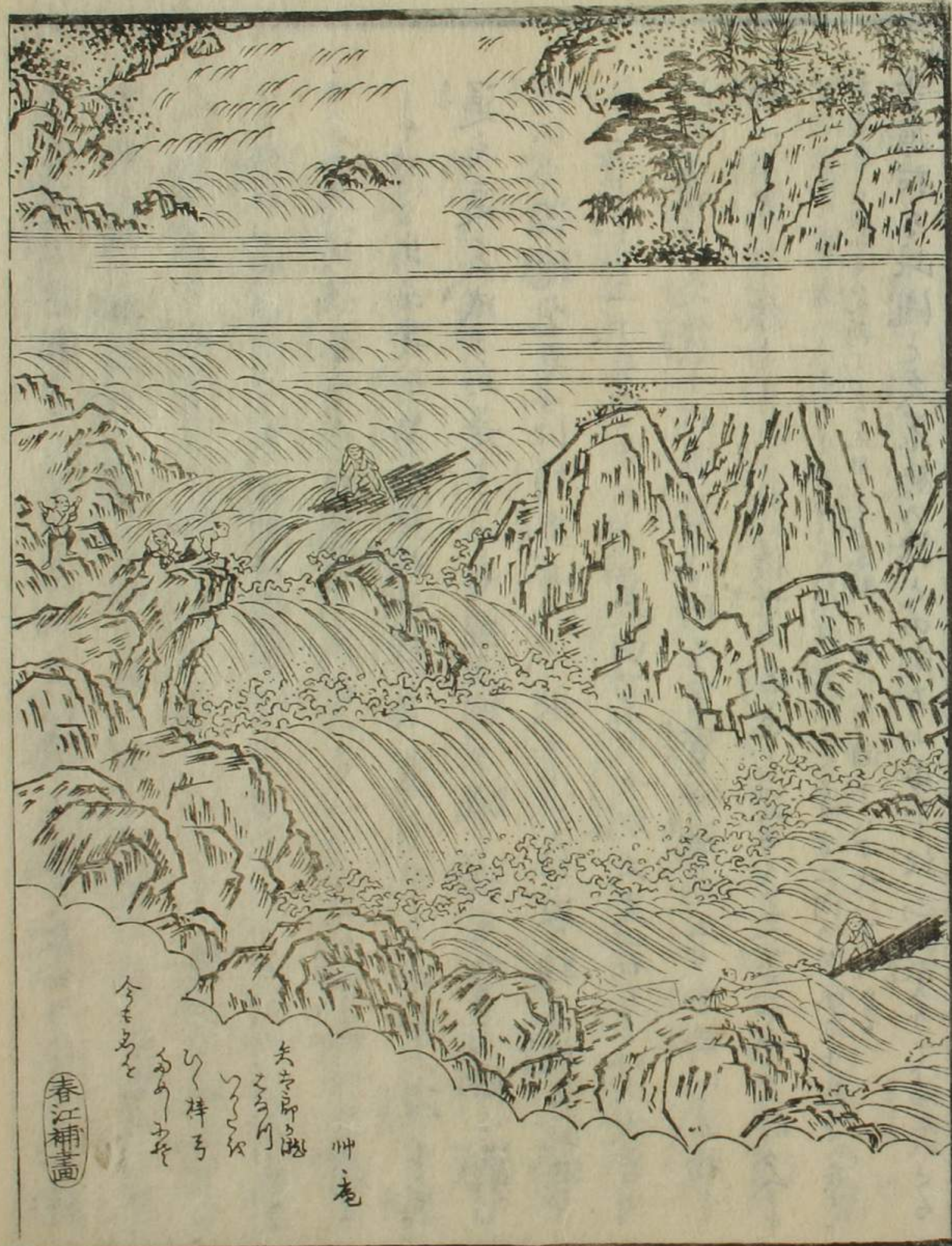
水内橋と土人撞本橋とも呼ぶ昔神仙天降アそ掛初とるとい
其奇巧言語絶えり此地両山甚と迫ア犀川の水多きりて落
彼北岨の半腹と穿く梯西より卯の方へ行と五丈四尺丈より
曲るく南へ大橋を渡り長廿十丈六尺廣廿一丈四尺欄基の高廿三尺
橋と水との間尋常れ水ゆく四丈余に至る碧潭盤渦見るに肝そ
さる巧匠相傳へく七年に一度改造る所なり

日本紀推古天皇二十年自百濟國有化来者其面身皆斑白
若_レ有_レ白癩 中畧 仍令構須彌山形及具橋於南殿時人号其人

曰路子工亦名芝香磨云野史曰推古二十年百濟國歸化人
有_レ白癩 如紀文畧之 又巧掛長橋今造遺諸國三河国八脛長橋水内
曲橋木襲梯遠江因濱名橋會津閻川橋兜岩猿橋等其外一
百八十橋上云

○水内郡 和名美 以水内村あり此地北へ戸隠の峻嶮小倚ア東南に犀
川と帯び西へ境川東に浣花川あり一島の如く水内橋の奇巧
なかりせば便ありト按る小みのられ名を以て出さる一後み郡の名に
及ぶるむ塩囊鈔曰信濃國も高れ地なるに殊小此郡の高れれば水
落の郡なりと此説おほけりト夫十郡何れも高きとげら今信濃を
水源とみる川は千隈川岐曾川天竜川石二川姫川泉川堺川その因
腰に出るれを大井川神奈川荒川利根川等猶其外あり九十
隣國の首領地乃高れありかくれ如く

○彌太郎の滝 水内郡 此も尋常の滝ありは兩岸より巖石は
出くさばうりれ大川を爰に迫りく流七八間半に之を落し水勢烈



夫之節の
 ころり
 びく様
 のめり
 今も
 春江補畫



小本若川
 岩方み
 新水伝
 筏を
 運ぶ
 寅亮

弥太郎の
 光明岩 七
 大黒岩 女
 此川の
 大岩なり
 所之

逆浪雷動してたゞ一水と活潑して玉を散せりたゆみく跡
を即ぐ庵と跡ふ所以往古跡太郎といふ剛強乃若者思へらる
人々一代名も末代予此瀧小筏の道を閑んやて親族小暇乞とな
し神仏小祈誓とて多酒沢水に乗入るが忽水底小沈没せり然も
やも天道其志を介給ふや良あつて一丁をり下流に活然と
して浮き出ふ其形勢心身俱小健なり是を始とて今に筏を乗
通き更と成るは是よりして彌太郎が瀧と稱するなり傍の巖を
傳ひく其滝を見るに須臾めく水々より衣袂を浸き此瀧を
乗下りて二丁を南へ東へ曲りて七刻大黒岩などといふ大岩川
れ央ふりて是筏士れ甚恐る所なる實や政易公が本論に萬物と
俱ふ不盡卓然として不朽の後世の名也といふも是等をやりぬる
當時は流を穿る者八人あり勇壯とては業務とて五寸方二間の材木五十挺を一筏と
灘越く百挺ふも新丁より五里乗下る料二貫文内灘十八丁代一貫文なり

○吉原村も此瀧と久米路の橋との間なり少くは山に登りて陰をく

老樹の中の熊野權現は宮神寂て立給へ

吉原の譜

持も更級乃郡なる芳愈て一里れしるる一の高代の昔
尔のむらん今にの事さう旅を知る人し形をさるる爰に
熊野の権現於るはあぬとて此御柱を以てしるるに朽
まはるやめしははいさや改免造らむとて持が社をさへち
ちの棟本とやうして大同三年某の月日月見乃郷の明の
里とてさるる今にさるる一千余年扱を早霜并に移り
て此よりして小垂乃郷千國れ里とてしるるや南を舞それ
とてさるる御守の武田り属せりのは是より季一しや西り
牧の島てし言津あり又琵琶城とて是より上を那翁馬場
美濃守乃知るよし也今も持のうらもあれとてさるる
しるるや州某の露にらむるは持のあ又さるるを母牧の宮れ
郷に琵琶を里と改免とてしるるは持春秋の詠と殊文亦中

みも名どくし多と四社七清水しんすいのくまきつゆは熊野
権現飯繩社いひづな社上の諏訪下すわ飯訪中なか峯たけに清水一杯いちぱい清水蒲
田うら清水水上みづのうへ清水岩いわた清水柳やなぎ清水櫻さくら清水是等しんすいと
「淡くもよろや又汲人あり」我事半わがことはんの山の井いに水と
秋風晴あきかぜ舟南川ふねのかわ又またあとの後のち誰たれやらん八景はつげいをそへらま
せと笹峯ささのね暮雪くれせきの山のやまに秋月あきづき光明寺くわうみやうじ晚鐘ばんしゆ宮澤夕照みやざわゆうしやく
下宮晴嵐しもみやはるあざな田尻夜雨たじりよる千原田ちのへ落雁らくがんせんちれ帰帆かへふなりたりし
まめをゆきりきり名もなきに久米海くまいかいのくし絲いとを糸いとが
滝津たきつ大黒岩だいこくいわ光明くわうみやう是らこゝ皆みな犀川さいがわ乃流なりながつぎく
名と後のちなりきり今いまと川がわのの頼よりをた代しろのの頼より
さひく百有ひやくあり餘あま戸と春はるれ霞あせ秋あき乃紅にべに葉は取と集あつく風情ふうせいを
中なかくは見所みどころね月つきをあ姨あや推おをおりて山のやまのの縁えり
もはくしやちま

「山み後く乃とかくはき山里やまのありて隈かどたれおまれ月つき乃舟
草くさはあはれさも感あは思しみきつとねくくめても山のやまのの縁えり
ゆとむう一ひと代しろ今いまをありて水みづ荳まめはあららとあらら
人ひともがねと老おきな小こ摠との身みの令いははりて秋あきとつび
はく艸くさの産うぶ有あり不ふ題だいして蕭せう然ぜんとしてまびしを愛あいを西にし
行ゆ乃歌うたに同おななりてら入い新あらたもたれ傳つたおそるれとれ
秋忠あきただ山里

妹さびきかへし我あゝ免ゆるうらりれま

北越きたえつ誓士ちかし 芙蓉房ふようぼう長嘯ちやうせん

○牧まきのの寫しや古城こじやう琵琶びばが珠たまとつ昔むかし武田ぶた信玄しんげん侍しやう大將たいしやう馬場まば美濃みの守しゆ
居城いじやうなりし此邊こゝを都みやこく山中やまのなか三萬石さんまんにしやうと今いまはつ即すなは美濃みの守しゆ
さるし今いまは代産しろのうぶの有ありと眼まなこ下に犀川さいがわ深淵ふかふち曲まが又またの手てに繞めぐり自みづか
然しかの斷岸たぎり高たかく峙たてらて要害やうがい堅固けんこ乃城地じやうちと見みゆ此こゝわらりれ形かたち容ようは

地名考
 世に傳へる泉、小次郎
 親衛、動力勇氣傑出
 万人、或負大船、而
 上下于水陸、と
 云ふ、按、筑前
 泉の産る所、
 親衛源満快子
 満国九代孫
 泉次郎
 公衡の
 子なり
 肥原氏曰
 信州犀川、
 犀とあり
 頼朝、御泉の
 親衛、命じて
 掃、むとせ、
 日よ、犀川の
 名ある、ゆゑ



春江補畫

犀乗、沢下、地を
 志、れとも、本朝、小
 糸、を、必、犀、の説
 ぬ、た、た、か、
 ち、の、し、も、り、
 才、同、名、あ、く、よ
 を、及、れ、た、り、
 加、茂、の、こ、お、川、
 何、よ、う、く、る、名
 あ、や、ま、外、な、付
 あ、へ、
 按、に、古、事、記、
 本、和、の、さ、お、川、
 水、と、る、山、や、
 あ、る、ゆ、志、の、名、と
 名、義、こ、も、よ、う、
 佐、章、ハ、山、由、理、の
 古、語、なり、
 右、の、説、
 ろ、つ、て、卷、牛、伏、寺
 の、条、下、に、り、つ、て、
 親、衛、の、な、を、附、合、
 泉、の、長、首、ハ、別、人、
 狩、野、ハ、



芙蓉房が譜に粗見へくさば贅せざれなり是より川小をひ山
根と傳ひ二里守りて下り小市に渡りて越へ善光寺に到る
せもく犀川の水源を尋らば鳥居峠小湫觴一本山宿の裏通
りて元洗馬へ廻り小流を是と本曾梓川安曇郡穂高岳より出て南へ流
る西行き飛騨境より又東へ流
る北流二川落合ひ松本の西北養老坂の下熊倉に橋をより下
を犀川とてより萬水川の上野組長尾組成相組等此用水尻残ら
次合水して犀川へ入る又高瀬川を加賀越中境より山間凡六十
里の間数十箇所れ谷川落合く犀川へ入る又鳥川の飛騨境より二
十里餘流きて来り犀川中房川天魔澤みぬ越中境より出て具
梅村の地先ゆく落合保高川と唱へ狐島といふ所ゆく犀川へ入る
何れも大川ゆして深山より坂落れ荒川なり此外小川の落込
ち数志れを雪解雷雨等れ節の水溢て田畑民家を推流とて幸
折くとも犀川の琵琶が城乃麓まで小流一是より曲りて東へ行

南へ巡り又東流し丹波嶋の渡口より三十町ほど東豆嶋の先小
て千隈川と流きて逢ひ交り五十余里北流し越後の新潟とそ
海小入なり越後ゆくも一向に信濃川と称せり

犀川といふ名義を人皇十二代景行天皇十二年迄の湖あり今安曇筑下西
郡乃内なり
爰に白龍犀龍といふ夫婦の竜王住む一子をかく名と和泉の長者といふ
子或時母の犀竜長者に謂て曰汝我を棄て此湖と人里とるべしとて三清
池といふ滝を棄たり北海小糸の水道を開き千鳥やなせり其後白龍
王犀竜王といひ今に安曇郡有明の里佛崎の穴小入まうそのち長者
同く穴小入りその所に社を建て川會の神社と祝ひ存り今程おそら
りき一のまき金峯山牛伏寺の縁起及び所々此傳説大同小異なれ心と
留く山間の地理と慮るるに瑞穂は國乃ありは九も有りとぞ思はせり

善光寺道名所圖會卷之二終

